

残雪の峰

桜田靖

今は亡き高峰三枝子のヒット曲『湖

畔の宿』は、戦時中に青春時代を過ご

した年代に今もお唄われる。群馬県

の榛名湖畔がモデルとされる『♪山の

淋しい湖に一人来たのも悲しい心

♪』という出出しの哀愁を帯びた歌謡

である。誰が茶化したのか知らないけ

れど、このメロディに合わせた替唄が

ある。

♪お国のために戦った

タコのハツちゃん名誉の戦死

タコの遺骨はいつ帰る

骨が無いから帰れない

タコのハツちゃん可哀そう♪

タコは貝が進化した生き物で高度な

知能があり、眼球の構造など高級カメ

ラも顔負けだそうである。かつて火星

に人間に勝るとも劣らない高等動物が
住んでいる、と真剣に空想した時代が
あった。その想像絵は、まるでタコの
お化けみたいな格好をしていた。
生きた証しに、通常、人は墓地に遺
骨として骨を祀るが、その癖に他の動
物の骨は、工作物にしたり、栄養補助
食品にしたり、肥料にしたり、単に野
ざらしにしたり、どここの馬の骨だと馬
鹿にしたりする。要するに、自分達は
他の動物とは違うんだという、知能が
高いがゆえの人間の尊厳が、墓を建て
先祖を拝む慣わしを遙かな昔から営々
と続けているのだろう。功なり名を遂
げた権力者ほど立派な墓を欲しがるこ
とに、今も昔も変わりはない。

一

息子が真っ青な顔をして帰って来た。
この二、三日微熱などで気分の優れな

い横川勝は玄関の開く音で目を覚まし
ていた。
「何かあったのかい？こんなに早く帰
ってきて！」と朝からうつらうつらし
ていた床の中から息子に聞いた。
「ああ、テレビ付けっ放しで寝て！何
でもないよ。」と息子は「かずかと部屋
に入ってテレビを消すと、母親のいる
二階へあがって行く足音がした。茅ヶ
崎の海岸の方から春の潮騒が聞こえて
きた。
横川勝は一男二女の子持ちだった。
娘二人は早々に結婚して家を出ていた
が、長男の勝一はもうすぐ三十の声を
聞くのに独身だった。息子の仕事は、
父親と同じ駅弁会社の営業マンで結構
忙しい身だった。その息子が平日の昼
間に帰宅するなんて滅多にないことだ
ったが、父親の勝には第六感のよう

ピンと来るものがあつた。一月ほど前に還暦を過ぎたことだし、何となく思いつきで一泊二日の人間ドックを受け、その結果により更に脳や肺の精密検査を受けていた。彼は、若いときから腰痛の持病があつたし、酒は嗜むというより浴びるように飲み、タバコもいわゆるチェーンスモーカーだつたから、この年まで生きて内臓のどこかにガタが来ていない方がおかしいと自覚はしていた。これまで身体の調子が悪いのは、すべて腰痛のせいに考え、適当にビタミン剤や滋養強壮剤を飲んで会社
の定期健診による要精密検査通知はベ
リッと破つて肩籠に放り込み、医者に
診てもらふことなどなかつた。

二

翌朝、熱っぽく気分は優れなかつたが、勝は会社に出勤しようとして定時に起

床した。「ねえ、無理はしないでお休
みしてちょうだい。お願いだから。」と
妻の昭子が部屋に入って来て彼が折角
開いたカーテンをサアーと素早く閉じ
た。別段浮かぬ顔をしているわけでな
い。しかし、昨日の息子の顔色が勝の
心を過ぎった。昭子は、殊更平静を装
っているのかも知れないと考えた。
「そうかい。」と勝はワザと気のない返
事をした。会社に火急の用があるはず
もなかったので、妻の言うように休む
ことにして、「じゃ、もう一眠りさせ
てくれ。」と言い目を瞑った。昨晚何と
なく寝つけなかった勝はすぐに深い眠
りに落ちた。
いつしか勝の耳には母親の小言が聞
こえていた。「佐賀県警も駄目だった
のかね。自衛隊も落ち、学校推薦の会
社もみんな断られ、どぎゃんすつとね。

こぎゃんことなら高校なんか行かんで、
中学ば出たときに少年自衛官になつと
きや良かつたね。この前、卓ちやんの
休みで帰つて来んさつた時、立派な制
服姿じゃつたね。中学校じゃあんと
同じ組やつたろうが？」
卓ちやんとは、小学校、中学校と同
級生の仲良しだった南島卓三のことで
ある。
父は戦地から引き揚げて来た後は、
知り合いのついで国鉄へ現在のＪＲへ
に職を得て佐賀市内の踏切警手をして
いた。勝がことごとく就職に失敗して
も叱ることはなかった。元来が無口な
父であつた。黙々と晩酌し、お銚子か
ら清酒を杯に注いでいた。母の小言が
又耳に響いた。「父ちやん、あんたか
らも何か言つてよ。どぎゃんすつと
ね。」

父は薄給であり、母が家計を補うため小城羊羹の行商で唐津方面に出かけていた。自分で、自負心から自然と母の家庭内での発言力が強かった。――仕方んなか。笠原さんに頭を下げて頼むしかなか。と小柄だが肩幅の広い父がやつと重い口を開いた。――そうだよ。笠原さんの奥さんの妹さんが茅ヶ崎の駅弁屋さんの社長夫人だったわね。重たい羊羹をかついで商いをするせいにか、遅しい肉づきの足腰の母も同調した。笠原さんとは父母の仲人をした人、小城町へ現在は小城市で昔からの質屋を営んでいた。三月の晴天の日曜日に郷里の小城を後にした。父もたまの休みでいたし、佐賀市郊外の製菓工場の勤め人の兄清一も非番であった。両親に清一、中学校に通う妹の町子と敏子の一家総出で

茅ヶ崎へ旅立つ不肖の子の勝を小城駅
まで見送りに来た。勝は佐賀行の列車
をホームで待つ間も、特に話す言葉も
なく、時々列車がやって来る東多久の
方向に目をやった。「勝ちちゃん、よく
見ときんしゃい。当分、天山は見るこ
ともなかろうから。」と母が言ったら
「そうだな。」と寡黙な父も相槌を打っ
た。人気の少ない午後のプラットホー
ムから、故里の山の姿が町の低い家並
の上に見え、いるのが良く見えた。勝
がホームの柵に手をかけて、これまで
何くれとなく眺めて来た天山を名残惜
しそうに見ていたら、自然に家族の皆
が背後にやって来た。「今年の冬は雪
が多かったけん、残雪の多かごたあ。」
と長兄が口にした。勝は、なるほどと
思いながら陽光の中に静かに連なる天
山の青い峰々と山巔の残雪が銀色に照

り輝くのを目にしていた。

西の方角から畑中の鉄路をデイズ
ルカーが近づいて来たので、一家は一
斉にそちらの方向に目を遣った。勝は、
列車の彼方にある峰山を見て、卓ちゃ
ん達と中学生の頃アケビ採りなどで、
よく自転車に二人乗りをして遊びに行
ったことをぼんやりと考えていた。

三

「勝ちちゃん、起きてみる。」と二度寝
した勝の枕元で妻の昭子の声がした。

新婚時代このかた三十数年、家で二人
だけの時は、妻は夫にそんな風に呼び
かけていた。

「うん、田舎の夢を見ていたみたいだ。
死んだ親父やおふくろも、それに兄貴
も妹達もいたような気がする。」と力な
く答え、蒲団から身を起こした。夢か
ら覚めたばかりのせいにか、頭脳が冴え

ない。立ち上がったら足元がおぼつか
なかつたが、空腹感はあるので、壁
伝いにダイニングルームにそろりそ
りと足を向けた。
気の進まないまま、目玉焼きとキャ
ベツの千切、ワカメの味噌汁などの食
事を口にした。
「おいしい？」と昭子が作り笑いの顔
付で見つめている。「普通だよ」と勝
は素っ気なく答え、そばそと朝食とも
昼食ともつかない食事を噛み下した。
「お昼からT病院に行ってみる？ 先生
から診断結果の説明があるのよ。運転
はわたしができるから、行きましょ
うね。」
先だって人間ドックを受診した病院
であつた。最近こんなに気分がすぐれ
ないのだから、色々と病状を指摘され
ることは自明であつた。

「怖い話は聞きたくないな。」と勝は正直に言つて、平静を装う昭子の目に困惑の色が浮かんだのを見逃さなかつた。

「わたしも一緒ですから。不養生な暮らしばかりしてきたのですから、もう歳も歳ですし、先生のアドバイスを受けて健康な生活をししょうよ。」と昭子が真剣な眼差しで乗り気でない勝を説得した。

四

勝が予期したより若い医師が待つていた。診察室の窓に春光に満ちた湘南の海があつた。のどかな窓景色に横川夫妻が目を遣つていたら、「遅い！午後一番で来るように言つたでしょう？」メガネの位置をちよつと直すと勝を睨みつけながら甲高い声をあげた。「先生、すみません。交通渋滞があつたものですから。」とあわてて昭子が謝

った。「わたしは忙しいのですから。」
と医師は言つて口を尖らせたまま沈黙
した。夫妻は黙つたまま頭を下げた。
頭をもとに戻して勝はまじまじと医師
の顔を見つめた。白晳の細面は頭脳明
晰な人物と直感したが、神経質な上に
高慢な人に思えた。
「あなた、本当のことを聞いて平気で
すか？これまで自分の健康のことを考
えて生活したことがありますか？わた
しは医者として、自分の務めですから
何でも話しますよ。いいですね。」とた
たみかけるように口走つてきた。
「わたしは聞かなくて結構です。」と勝
はさつきからこの若造の奴め、生意氣
なという心境にあつたので、売り言葉
に買い言葉のような具合で反射的に答
えた。
「それならロビーで待っていないなさい。」

とピシヤリと平手で頬を叩くような感
じでこの医師は応えた。
「あなた、先生に何ということをおつ
しやるの。」と狼狽した様子で昭子が勝
の肩を揺すった。勝はかまわずに「聞
いといてくれ。」と吐き棄てるように言
うと、憤然と席を立った。
勝は病院の玄関前の路上でタバコに
火を点けた。手が震え自分でも興奮し
ているのが分かり、肩で大きく息をし
て落ち着こうとした。一本だけタバコ
を吸い、ロビーに戻ると椅子に座って
ぼんやりしていた。やがて昭子が能面
のような固い表情でエレベーターの方
からトボトボした足どりでやって来る
のが見えた。勝はここだと手を振った。
勝の居場所が分かると、悄然とした表
情を急に改めて口元を綻ばせ白い歯を
見せた。勝は妻の作為的な笑みと判つ

ていた。

「優秀な先生でしたわよ。アメリカの
大学病院で研修した経歴もお持ちで、
あなたに一番良い治療を約束して下さい
ったわ。」

「それで、俺はどうなるんだい。」

「できるだけ早く検査入院して下さい
って。今、空きベッドがあるので今日
中にでも連絡を頂きたいそうよ。」

「人間ドックで散々検査して又検査す
るのかよ。金儲けばかり考えやがって
腹が立つな。」

「それとこれは別よ。今度は最良の治
療法を決める検査だって。一週間程度
だそうだから、明日にも入院して頂戴
ね。会社のことは、勝一がちゃんとし
ますから心配しないでね。」

「分かったけど、俺は絶対に本当のこ
とは知る気がないからな。あの若造に

これだけは念を押していくくれよ。」
「まあ、困った人だこと。」と妻が顔を曇らせた。

五

一面に松原が広がり、その向こうの浜辺に波がのたりのたりと寄せては返していった。蒼い海のはるかに伊豆の大島が、やや霞んでいた。

横井勝は、これから何日この景色とつきあうのかと思ひながら窓辺に立っていた。時々ヨットが行き来する以外、さほどの変化もなくすぐに厭いて、ベッドになりラジオを聴いた。確かにな気分がすぐれないのは自覚できていた。昼前には話し相手をしてくれていた妻も帰宅し、本を読む気力もなく転寝しながらぼんやりするしかなかった。

いつしか十数年位前の夏に子供達を連れて八丈島のホテルに滞在した夢を見

ていた。妻と子は遊びに出かけ、自分
だけ部屋に残って夕方まで海を見つめ
ていた。
すくに目が覚め、雑念がうたかたの
ように浮かんでは消えた。十八の春に
故郷を離れて以来、一筋に茅ヶ崎の駅
弁会社で働いてきた。昭和三十年代、
日本はもはや戦後でないと喧伝され経
済復興の兆しは顕著であり、駅弁会社
も成長路線上にあった。勝は特急、急
行、普通列車のほとんどが停車し、列
車同士の待合せ時間も長い湘南中央駅
で駅弁の売り子としてデビューした。
父に似て小柄だが肩幅は広く、母に似
たのか足腰も強く駅弁売りは苦になら
なかつた。時刻表とにらめっこし、列
車が到着する度にホームを「弁当、弁
当！」と駆け回った若い頃を思い出し
た。根っからまじめな性格の勝は、ひ

たすら一生懸命に弁当を売りまくるだ
けの日々だった。人生設計とか、そん
な七面倒なことは考えた覚えもない。
親が生きているうちは、盆正月の休
みにせつせと帰省したが、この二十年
余は家を継いだ兄から父母の法要で呼
び返される以外に帰っていない。勝は
佐賀市内の私立高校に通ったので、地
元の小城に親しい同級生はほとんどい
なかった。同じ町内の幼馴染の二、三
人とも帰省の日取りが違い、学校を出
て以来会っていない。卓ちゃんの顔が
夢うつつに浮かび無性に会いたいと思
った。
六
自分の病状は具体的には知らないし、
知りたくもなかったが、のつぴきなら
ぬものだとは薄々感じている。今朝も
妻は愛想よく病室に現れた。「長いこ

とここにいるわけじゃないから辛抱してね。」と優しく言う。「兄貴や妹達には何も知らせるなよ。」と勝は念を押した。「わかっていますよ。お兄さんに余計な心配をかけたくないのでしょう。」勝はベッドの上で力のない瞬きのアイコシタクトをした。「
昨晚も何度も目が覚めた。妻の昭子と見合結婚した経緯などを思い浮かべた。東海道新幹線の開通で人々の旅の仕方が変わっていった。在来線の特急、急行でも、だんだん列車の窓の開閉ができない構造になってしまい、駅のホームを駆け回る従来の駅弁売りのスタイルは廃れていった。駅構内やホームの売店などで販売するようになった頃だった。
勝の父母の仲人をした小城の質屋の

笠原さんの奥様の妹が社長夫人の駅弁会社であり、彼の働きぶりは、ずっと目にかかけられていた。二十代の末頃だった。春のある日、社長夫人から直々に電話をもらった。横川君、今度の日曜日は休みにした。横川君、今度の遊びにいらっしやい。ちから、うちに遊びにいらっしやい。ちやんと床屋さんで髪を刈り、背広を着て来るのよ。」

控え室で憩っていた彼は畏まって承諾した。素直な勝は理由も尋ねず「はい」とだけ短く答えた。茅ヶ崎の海岸に近い閑寂な屋敷町に社長の邸宅はある。松の木が茂っていた。緑濃いつた。一帯に松の木が茂っていた。聞いた。緑濃い松ヶ枝の間から潮の音が聞こえる。広い応接間に通された。良くて手入れさされた枯山水の庭が陽春の光で明るかった。

横川君、頑張って仕事しているな。

今年のお秋には十年勤続の記念品を考え
ておくから益々精励するんだよ。」と髪
に白髪が目立つ肥った社長が口を開い
た。
「横川君のお父さんとお母さんの縁結
びをしたのは、わたしの姉ですから、
縁とは不思議なものだね。」と社長夫
人も続けた。初対面の時の湘南マダム
という上品な洋菓子のような印象に変
わりはないが、五十代の半ばという年
相応の容色の衰えは感じられた。
「君は、会社の未来像をどんなふうに
描いているかね。」いきなり社長が尋ね
た。勝はキョトンとした顔付になり、
心臓の鼓動の高鳴りを覚えたものであ
る。
「あなた、今日は面接試験じゃないわ
よ。別の用事で呼び出したのじゃないわ
って？」と夫人が笑顔でとりなしたの

で彼はほっと一息ついた。確かに、弁
当、弁当と叫んで人一倍陰日向なく働
いてきた自負はあった。だが会社の経
営に関することなど、これっぽっちも
考えた覚えはなかった。
七
「サア、遠慮なくやりたまえ。親戚じ
やないけど、うちの縁者の一人に変わ
りない。」
勝が座敷に通されたら、重厚な漆黒
塗りの卓袱台に一抱えもある豪勢な鮎
桶と小鉢料理や吸い物碗が用意されて
あり、すぐに着物姿の若い女が静々と
いった風情で入ってきた。勝の右側に
夫人が座り、ビールを注いだ。くだん
の娘さんは、ピョコンと一礼すると彼
の前に座った。その隣が社長だった。
四つのコップが金色のビールの液体で
満たされた。

「横川君、紹介しておくよ。平塚に
る弟の長女の昭子さん、ぼくの姪だ
よ。」
「横川君、これはお見合じゃないから
固くならなくていいのよ。」と夫人が補
足するように言ったら、クスツと娘さ
んは微笑んだ。
「ええ、あのー、社長の弟さんとおっ
しやいますと、専務さんのお嬢さんで
すか！」勝はどぎまぎしなから「湘南
中央駅で売り子をしている横川です。」
と頭を下げた。
「これ、そんなに畏まることないよ。
さあ、会社の発展に乾杯だ！」と社長
が間髪を入れずビールのコップを持ち
上げたので、勝達もあわててコップを
手にした。
「横川さん、採血よろしいですか。」枕
もとからの声で夢から目覚めたら白衣

の 中 年 の 女 が 立 っ て い た 。 「 エ ッ 、 又
で す か 、 今 日 は こ れ で 二 回 目 で す よ 。」
と 文 句 を 言 っ た ら 「 大 丈 夫 で す よ 。 こ
の 程 度 。」 と 勝 の 腕 を 取 り 慣 れ た 手 順 で
採 血 し て 病 室 を さ つ さ と 出 て い っ た 。
ま る で 吸 血 鬼 み た い だ と 呪 わ し い 気 持
ち に な っ た 。

八

彼 は 気 を 取 り 直 し て ベ ッ ド か ら 降 り 、
憩 い 室 に 降 り 自 動 販 売 機 か ら 缶 コ ー ヒ
ー を 買 う と 、 先 程 の 夢 の 続 き に 想 い を
馳 せ た 。 そ の 日 は 事 実 上 の 見 合 で あ り 、
鎌 倉 の 女 子 大 を 出 て 東 京 の 新 橋 の 商 社
に 勤 め て い た 姪 が キ ー パ ン チ ャ ー の 仕
事 が 嫌 に な り 、 辞 め て 家 事 手 伝 い と 称
し て 家 で プ ラ プ ラ し て い る の を 勝 と 引
き 合 わ せ る た め に 家 に 呼 ん だ の で あ っ
た 。

昭 子 は 三 つ 年 下 だ っ た が 、 勝 か ら 見

たら会社の専務のお嬢さんだし、何か
と気後れすることが多かったが、それ
でも後日、まだ健在だった田舎の両親
を呼んで正規なお見合をし二人は結ば
れたのであった。あの茅ヶ崎の社長の
邸宅でご馳走になったことは、人生の
節目の日であり、鮮明に一部始終を覚
えている。昭子は美人という柄ではな
かったが、育ちの良さからの気品はあ
り、その時の言葉遣いや立居振舞の優
雅さには勝も感銘を受けたものだ。
ビールルの酔いで口が滑らかになった
社長の言葉も忘れられない。プラット
ホームを駆け回って弁当を売る時代は
終わった。これから営業攻勢を仕掛け
て、先ずは首都圏エリアの国鉄へ現J
Rーや私鉄各線の駅構内の売店で販売
したり、列車内での販売、それにデパ
ートや大手のスーパーマーケットの催

事でも駅弁を販売すると熱っぽく語った。それまで「鰯の押し寿司」一本槍で営業してきた方針も変えるという。製造工場を拡大し生産スタッフを充実させ、季節ごとに弁当の中身とラベル、もちろん外形も工夫し、多彩な駅弁を売りたいと言った。

社長の思惑通り事態は推移し、例えば、春は「桜弁当」「菜の花弁当」「若葉弁当」「夏は「ヒマワリ弁当」「潮の香弁当」「秋は「コスモス弁当」「菊花弁当」「月見弁当」「冬は「福寿草弁当」「梅ヶ枝弁当」など、四季折々に変化させ客の購買意欲を刺激してビジネスは大いに成長した。弁当の中身は、旬の素材を入れ替えるだけで、専ら包装の絵柄とネーミングでの勝負だった。失敗作も数々あった。「さざんか弁当」はそこそこの売れ筋だった

が、『さざんかの宿』という人妻との不倫の逢瀬が主題の流行歌のヒットのせいで、不倫弁当などと陰口を叩かれて販売を自主的に止めたものであった。ある年の「紅葉弁当」は、鮮血のようにな赤い紅葉のデザインを大きく配したラベルに較べ、箱の中の采はゴボウやダイコンの煮物、昆布巻、イカの煮付、小女子の佃煮など地味な色合いに、薄い紅鮭の塩焼きとニンジンのサラダと紅シヨウガを添えて色調を整えたのだが、「落ち葉弁当」とか「枯れ葉弁当」などと同業の弁当屋からまで揶揄される始末で、すぐに製造を打ち切った覚えもある。いずれにしても、同族企業であり専務の娘を嫁にした勝は、それから縁者として係長、課長、部長とトントン拍子に社内での地位を上げたたのである。

その日の夕刻、息子の勝一が病室に顔を出した。「気分はどう？」と訊くから「変わりないよ。早く家に帰りたいいな。」と正直に心境を語った。「ドクターに面会したけど、そう長い入院にならないそうだから少し辛抱してよ。」と慰留された。「田舎の兄貴なんか連絡していいないだろうな。」と念を押したら、大きくうなずきながら「のり子やます子にも、すぐ退院するから見舞いはいいよ。」と勝の二人の娘に告げたことも教えてくれた。息子も親子だから似たり寄ったりの根が正直な性格で隠し事は苦手である。先程から努めて明朗に振舞っているが、勝は時折息子の顔色に覚悟を決めたようにうな深い翳りが出るのを見逃さなかつた。こいういう狭い空間に閉じ込められ

ていると、人間の勘は鋭利になるものらしい。「のり子のお腹に赤ん坊がい
ると分かったよ。父さんも孫の顔を見
るまでは頑張ってたね。」と勝一が不用意
に口にしたことは、言った息子本人は
気がついてないが、ベッドに横たわる
勝には自分の身体の状態が危機に瀕し
ていると存分に悟らせるものだった。
勝は、その晩寝つきが悪かった。残
っている命の時間をいかに使うか熟慮
する時だと自覚した。
生死去来という仏教の奥義は知らな
いが、新しい命が誕生し、古い命は散
っていくというこの世の定めへの思い
や、生きている自分と死んだ自分の間
を彷徨する想念が一晚中否応なく彼を
責め苛んだ。

翌日の午前中、寝不足で食欲のない

ままベッドでラジオミュージックを聞き流していたら、昭子が入ってきた。長年の趣味のテニスで小麦色の肌をしてゐる。短めのスカートから伸びるカモシカのような脚に衰えは見えない。彼は「今、何時だい」と力のない声で尋ねた。「あら、嫌だわ。ラジオの時報で分かるでしょうに。もうすぐお昼だわよ」と昭子が顔をのぞきこんで言った。「顔に何かくっついてゐるのか？」と言ったなら「今日は顔も洗つてないでしよう」とズバリ指摘された。彼が入院しているのはホテル並みの贅沢な個室で、洗面場もトイレも付いていた。「これから洗うよ」と起きたが二、三歩ほど歩いて少しよろけた。すぐに態勢を取り直したが、足腰が萎えているのが身に沁みて分かった。

「ご飯、きちんと食べているの？」と
昭子が心配そうに声をかけた。
病院職員が運びこんだ昼食を口にし
た。味も素っ気も感じられず黙々と嚼
み、スープで胃の中に流しこんだ。
「美味しいマグロ井でも食いたいな。」と
言ったら、「もうちよつとの我慢だか
ら頑張ってる！」と言って窓の方に目を
やった。昭子の横顔の目じりに一筋光
るものがあるのを彼は見逃さなかつた。
腹に食べ物が入ったら腹が重くなつ
たので眼を瞑った。雑念が浮かんで
消えた。「君は良きにつけ、悪しきに
つけ愚直だね。」とあの茅ヶ崎の邸宅に
招かれた日に社長から言われた。その
日の帰りに茅ヶ崎駅の近くの本屋で立
ち読みで国語辞典を引いた。「愚直」
とは馬鹿正直という意であつた。勉強
は嫌いだし、小学校にあらがってから高

校を卒業までの生徒生活で芳しい成績
を取ったことなど一度もないので、自
分が頭脳明晰、優秀な人間でないこと
は分かっていた。大体、学校がする生
徒の成績評価の五段階表示も、優秀か
ら劣る、5から1、AからEと何度も
変遷し、一体何をやっているのかと思
ったこともあった。　　

しかし、愚直でも誉められる一面も
あるのだと分かり、奇妙な嬉しさを覚
えた日でもあった。あれから会社の業
績は飛躍的に伸びた。別に勝が活躍し
たからではない。社長や専務とその営
業スタッフの努力と弁当製造現場の厨
房のスタッフの努力の賜物であらう。

彼のやってきた仕事は、各駅などの弁
当販売店を巡回し、女店員に「ご苦労
さん。」などと声をかけたり、各種の弁
当の売れ行きの状況を駅別に簡単なグ

ラフにする程度の簡単なものであった。
言い付けられたことを、そのままやっ
ただけであつた。肩書きは販売調査担
当係長とか売店人事担当課長とか営業
管理部長とか、部下も持たず、はっき
りした任務のない社長、専務という経
営者の縁者だからこそそのポストを歴任
してきただけである。まさに愚直の生
涯だつたと納得できた。
お供の白衣の婦人達を引き連れてく
だんの医師が回診に入ってきた。
「気分はどうかね。横川さん。」という
医師の声で目覚めた。例の陰險な目で
まじまじと顔を見つめられた。「年長
者に向かつて生意気な口を利きやがっ
て。」と内心では憎たらしく思ったが、
天敵と哀れな餌食のような感覚は消え
ず、「はい、別に変わりはないです。」
小さな声で懇懃に返答し、自分自身の

卑屈さに嫌気がした。医師は供の婦人が持参したカルテを覗き込みながら、「横川さんは愚直な性格だつてね。」とニコリともしないで眩きながら勝のはだけた胸や喉のあたりに聴診器をあてたり脈をとったりしていたが、やがて、うーんと唸ると無言で背中を向けて室外へと向かった。勝は愚直とは昭子か息子の勝一が医師に告げた言葉だろうが、馬鹿正直の『馬鹿』とでも言われたいようなひがみを覚えた。

十一

その日処方された薬の中に睡眠薬でもあったのか、その晩は早々にテレビでも消し忘れて熟睡し、朝まだきに目が覚めた。もう眠れそうにもなかったの

で、しばらく窓辺にぼんやりと立って

いたら朝日が昇り、仄明るく海面を照

らした。窓のすぐ下の八重桜の花も散

って、すっかり葉桜になっていた。自分
が年老いることなんか今まで考えた
こともなかったが、海岸に寄せては返
す白波を眺めていたら、この波のよう
な営みを自分も一日と積み重ねて、
いつしか還暦を越えたと思った。昔の
ように人生五十年ならば、とつくにロ
スタイムを生きているのだ。今、聞き
たくもないので病状をはつきりと知ら
ないが、近い先に死の壁が横たわって
いるのは薄々承知している。
十数年前、社員旅行で行った群馬の
温泉場の土産品店の日本タオルに「六
十、七十は働き盛り、九十になってお
迎えが来たら百まで待てと追い返せ」
などと印刷したものを誰かが買って皆
に見せびらかしていたのを自分も見て
呵々大笑した光景を思い出した。その
頃はまだ四十代で、自分の死ぬ日が来

るなんて頭の隅っこにもなかったよう
に思う。今、ここここに及ぶと嫌でも
残りの日々などを考えざるを得なかつ
た。
世間並みの先祖供養や初詣などの仏
心や信仰心はあるが、別段特定の神や
仏を信心して生きては来なかつた。神
仏の存在を信ずる、信じないなど意識
したこともない勝だった。ベッドに戻
って深呼吸をした。天井を見つめなが
らつつらつらと考えを巡らすと、幼くし
て病死した弟がいたことや、休暇旅行
で交通事故死した若い社員の葬儀の様
子を思い出した。人は生きているから
死に近づくのではなく、この世に生まれ
出て此の方、常に死は自分と隣り合わ
せに存在していたことに気がついた。
人にはなべておのれの玉の緒が尽き、
自分の肉体が減びる日が必ずやって来

る。ことが、はっきりと実感できた。彼は、一日も早く病室を出て家に帰りたいと思った。

十二

午後になって昭子が着替えなどを持参した。

「家に帰りたいよ。」と彼は弱音を吐いた。「もうすぐ帰れるから我慢してね。」と愛想笑いをして妻は慰めるしかない。「もうすぐとは便利な言葉だな。」と勝は独り言のように呟いた。

「明日、勝と一緒にドクターと会うのよ。その時に様子が分かるから、もうちよつとの辛抱よ。」と妻はベッドの傍らの丸イスに腰を降ろした。イスの直径は小さく、スカートのお尻が縁からはみ出していた。

「気分が落ち込まないうちに小城の兄貴に会って来たいな。」

「いいことよ。わたしも一緒に行きま
すけど、あの佐賀弁は苦手だわ。」と笑
った。
「俺が通訳するから心配するな。」
「あら、佐賀は外国じゃなくってよ。」
と妻が応じ、二人して笑った。勝はこ
の病室に入院して初めて笑い声を上げ
たように思った。
「俺は、親父やおふくろの死んだ年を
越えたからなあ。」としんみりした口調
になった。勝の父母とも五十代の末に
相ついで病死していた。
「寿命は人それぞれよ。先代の社長ご
夫妻も米寿を過ぎてもまだまだお元気
だし、私の父母も悠々自適で晴耕雨読
の生活よ。」確かに会社は勝の入社した
当時とは代替わりし、社長も専務も二
代目になっていて。
「なあ、俺は思うんだけど、百まで生

きて死んでも二十歳で死んでも、死ぬ瞬間の心地に大して変わりないのじゃないか？人生長かったと感じるか、あっけなかつたと思うか分からないが、同じような儚い感覚に襲われるような気がするよ。」

「まだ、先は長いわよ。そんなつまらないことを考えちゃ嫌よ。お医者さんの言うことを聞いて長生きしましよ。」

「あの若造か、俺はもう俺流に好きな生き方をするからな。」

「あら、元気が出たこと。そうしましたようね。」と妻は立ち上がって窓外の晩春の湘南の海を眺めながら殊更に明る

十三

横川勝は翌日の夕方、この海辺の病院を退院し茅ヶ崎海岸の自宅に帰った。

玄関脇の庭木も隣近所の樹木も、一週

間ほど前に家を出た時よりも若葉の柔らかな緑が枝をずいぶん広げているのが目にはいった。昭子の手回しが良く、嫁いだ二人の娘も里帰りしていて夕食の膳が準備されていた。」「パパ、お加減はどうなの。」「と娘達は玄関先まで迎えに出て異口同音のよう

に口を開いた。」「心配しなくて大丈夫だよ。」「と勝は氣丈に振舞った。」「こうして家族全員で卓を囲むのも久しぶりだなあ。」「と勝一が感慨深げに口に

にした。」「いつが予定日なのかね？」「と勝は食欲のないまま食卓の握り寿しにハシを伸ばしながら長女ののり子に尋ねた。」「それが順調だとお正月の最中なのよ。」「と申し訳なさそうに小声で答えた。

「正月生まれの初孫なんてめでたい限

りじやないか。」と勝が顔を綻ばせると、
のり子はやっと嬉しそうな表情になっ
た。本人以外は、みんな勝の病状を知
っているようで、言葉の端々にも用心
して口を利いていて、久しぶりの家族
一同の晩餐にしているのは重苦しい空気に包
まれていた。会社には休職手続きを済
ませたと息子から車の中で聞いていた。
明日から完全な自由の身で、これから
の空白のスケジュールをいかに埋めよ
うかとの思いにひたすら支配されてい
た。
「あなたたち、泊まっていけない
の？」と昭子が姉妹に尋ねたが、主人
が待っているからという理由でそれぞ
れ今日のうちに帰宅したいという。そ
の時に、次女のます子が「何かあつた
ら飛んできますから」と何気なく言っ
た。科白が勝の心臓にグサリと刺さった。

昭子も勝一もテレビのドラマを見ていた。たの、勝は「今日は早く寝るよ。」と寝室に向かうとしたら「お風呂に入った。」と昭子が立ち上がった。汗もかいてないし歯を磨いて寝ると言った。ら、「寝る前にお薬を飲んでね。」と二種類の錠剤を渡された。そして、体のどこでも痛みを感じたら教えてくれるように付け加えられた。彼は気分が憂鬱で食欲もなかったが、取り立てて疼痛はなかった。もちろん激痛が生じたらホスピスの治療で入院することになり、ぶさかではない。彼は、たぶん処方薬は抗がん剤だろうと推量したが黙ってうなずいて受け取った。

十四

勝は五十才の頃に自宅をリフォームし、家族各自に自分だけの寝室を兼ねた居間を持たせたが、一家の主の彼の

部屋が一番広かった。そこに入ると一
国一城の主になったような安堵感を覚
えた。嫁いだ娘達の部屋は空室のまま
になってしまいい勿体ない思いがした。
自室のソファに座ると放免され自由
の身分を得たような気分に浸った。早
く寝たいという口実で家族と離れたが、
到底眠る気にはならなかった。自分の
死が目前にあるとは思っていない。し
かし、それが近い将来に迫って
いるのであるだろうと思うと、何かをせね
ばならない焦燥感には襲われた。先ず
遺書は残すべきだと常識的に考えた。
白紙に自筆で日付と署名押印があれば
いいのだ。その気になった今夜一氣に
書き上げようと思いいペンと紙とを手
にした。財産は面倒が起きないよう法定
の通りとした。これだけで遺書の内容
としては

十分な気がしたが、昔の三行半のよう
なもの足りなさを覚え、何か付け加え
たくなった。
勝は一息大きく深呼吸をした。あま
り大量の空気が肺臓に取り込まれた感
覚はしない。死と向き合うと、あの海
辺の病院の若い医師の顔が不意に浮か
んだ。年配者に直に愚直だとは何事だ
と癩癩のような激しい感情が心のそこ
此处から噴きあがって来た。彼は勉強
することが嫌で嫌でたまらなかったか
ら、小さい時分は野山や小川で遊び、
高校生になってからは映画館で時間を
つぶした。高校生の時のカバンの中は、
その日の教科書とただ一冊だけのノー
ト、鉛筆一本だけだった。教師が授業
中に黒板に書く字も減多に写し取らな
かったから、それで十分にこと足りた。
通信簿をもらう度に親の小言を聞きな

がら育ったのだった。勉強しなかった
ことで、両親に肩身の狭い思いをさせ
たことを省みて悲しみはあるけど、社
会の誰に迷惑をかけた訳でもないと思
った。運よく親の仲人の伝で駅弁の売
り子となり一生懸命に働いたのが認め
られ、会社も高度経済成長という上げ
潮に乗り発展した。その間に昭子とい
う良き伴侶を得て、今では大手の弁当
販売チェーン本店の部長職の地位にい
て一男二女を立派に自立させ、巢立ち
させたのだ。自分の人生に未練の念は
これっぽっちもない。
十五
しかし、担当医師の顔を思い出すと
怒りでペン先が震えた。何がエリート
だ、何が偉いのだ、この世の名残に若
干の復讐心のようなものが生じた。あ
の若造一人への復讐ではない。現代社

会の構造そのものへ石つぶてを投擲する気になった。葬儀不要、墓不要、と遺書に続けた。あの世があるはずないだろう。自分がこれから死んだら、あの世にいる年下の実父母とどんな風に接するのだろうか。二才で死んだ弟とは、あの世でも兄弟なら、この年齢差をどうするのだ。坊主が方便で説いたことを、いまどき真に受ける馬鹿がいるのか。戒名も無意味だと思った。人類史上誰一人、あの世があるかどうか観て来た者はいないのに、あの世での名前なんていらない。実家の位牌に彫り込んである長たらしい父母の戒名もにわかには思い出せない。居士、信士が幾らからだの院殿の文字を挿入したら百万円だの、そんなの馬鹿げたお寺の金儲けの口実だ。それでも、名誉欲、遺族

の見栄っ張りで何十万円と払って偉そうな戒名をもらい悦に入っている世間の者は世話がない。戒名は無意味且つ不要だ、と付け加えて書いた。墓って何だろう。遺骨の保管場所、肉親の者、友人知人が故人を偲ぶ場所としてには必要だろう。しかし、万世一系の皇室の墓所だって、古い時代の古墳はどの天皇が埋葬されておわすのか、はつきりしていないというではないか。個人的にも、若い社員のバイクが道路の穴ぼこに車輪をとられ転倒する不運で夭逝し葬儀に参列したことなどもあるが、義理の付合いは納骨や、精々一回忌までで、その後はその親族とも疎遠になるのが常である。二十年もすれば、親族でもろくに参拝に來なくなると聞いた。都会の核家族なんか、早ければ五年、十年で無縁墓となり、墓

石は魂抜きとかいう儀礼上の読経をし、
ただの石になり石段の踏み石にしてい
るではないか。これはビジネスでしか
ない。大体、太古から動植物が生態系
営み維持されて来た折角の貴重な自然
を破壊して墓地にするなど、坊主にこ
そ天罰が当たるだろう。
この世が無限にいつまでもあるわけ
がなかろう。核兵器による世界大戦や
文明の廃棄物がもたらす異常気象に発
する地球規模の大災害、それに彗星や
小惑星の地球への衝突により人類が滅
亡しても何の不思議もない。そのうち
太陽が燃え尽きたら終わりじゃないか。
墓を残して何になる。勝の心の中に
次々と思念が湧いていた。
あんな狭くて真っ暗な闇の中に眠っ
ていられるか。最後は、自分の遺骨は
故郷の小城の山に散骨せよ！と強い命

令口調で締め括った。
そして、日付を書きいれ署名押印して、
封筒に入れ糊付けをした。
十六
「もうすぐお昼よ、起きてみる。」昭子
の聲が目覚し時計になった。軽い偏頭
痛はあったが寝てばかりいても仕方な
いので顔を洗いに洗面所に入った。鏡
に自分の顔と一緒に死神でも写ってい
るかのように限なく見つめた。幼い頃
に爺婆から刷り込まれた迷信は一生消
えないものである。昨晚、あの世なん
かあるものかと思われほど思いつめた勝
にしてみても、一晚眠ったなら地獄極楽の呪
縛からは逃れられないのが人間の性で
ある。しかし、意を決して書いた遺書
は毛頭撤回しない理性も又持ち合わせ
ていた。今更ジタバタしても何も解決
しないと思っただ。どんなに頭脳明晰な

天才でも、宇宙の果てとかあの世とか、
この世の終わりとか考えても答えは見
つからず、反って気が狂ってしまいうも
のである。愚図愚図考えるだけ馬鹿馬
鹿しいと勝は思った。
「気分はどうなの？」と昭子がさりげ
なくダイニングルームの食卓についた
勝の顔色をうかがった。
「別に。」と彼はにべもない返事をして、
炒飯と味噌汁に白菜の漬物の昼飯をぼ
そぼそと口に運んだ。
「小城のお兄さんがいつでも帰って来
いって。晴耕雨読の生活って笑ってお
っしやっっていたわ。」
「ああ、電話してくれたのか。兄貴に
会いたいな。」
「それから南島さんってお友達も退職
して家にいるってことよ。」
「そうか。卓ちゃんにも会いたいな。」

田畑町から同じ中学に通ったのが四人
いたよ。」
「勝ちゃんも含めて四人？」
「そう、皆どうしているかな。飛行機
で帰りたいから手配してくれないかな。
お土産は空港で買うからいいよ。」と昭
子に頼んだ。
彼はその後、日がな一日溜め込んで
いた写真をアルバム帳に整理しながら
過ごした。
十七
その二日後の晴れた日、横川勝夫妻
は羽田から空路佐賀入りをした。佐賀
空港には佐賀市内に住んでいる上の妹
の町子が迎えに来ていた。子供の時か
ら元気者だったが、髪には白毛がめっ
きり増えていた。
「お兄さん久しぶり！何年ぶりかし
ら？」と笑顔でロビーに待っていた。

「確か、五年前の盆に帰ったが、その時は兄貴と敏子に会って墓参りして帰ったよ。」と勝は唐津に住む下の妹と会ったことを思い出した。やはり嫁いで長年唐津市内に居を構えている。「そうね。その年は亭主とシドニーに旅行だったのよ。あっちは冬で着替えが大変だったのよ。」と屈託なく笑った。「お前とは十年以上会ってない気がする。」

「そうね。人生ってあつという間に過ぎていくのね。」と言って、昭子に何やら愛想を言いつつ車まで案内してくれた。

「兄さん、少しやつれたみたい。」と町子は小城に向かって運転しながら言っただけ。助手席に座った勝は「うん。」と気のない返事をしながら遠くに見える天山を見つめていた。

「旧暦で言うと今が清明の候なのでし
よう。暑くも寒くもない一番良い季節
ですわね。」と後ろの座席から昭子が話
題を逸らした。
「昔はこの辺から小城まで一面の菜の
花畑だったわね。」
「いいや、この時期はもう刈り終わっ
て稲作の準備じゃなかったかね。」と勝
は答えたがもうはつきりとした記憶は
なかった。
田畑も多いがビニールハウスが目立
ち、めっきりと住宅地が増え、すっか
り様変わりしてしまった佐賀平野を車
は疾走し、やがて小城の街中に入った。
真昼に近い街路は春光にあふれていた。
「誰も歩いてないわ。」と昭子があきれ
たように言った。処々に早咲きの紅つ
つじが鮮やかな晩春の閑寂な路地を車
は何度も曲がりくねりし、街はずれの

一軒家の庭先に止まった。

十八

「よう来んしゃったね。早よう、はい

んしゃい。」と外の気配で玄関先まで出

て来た兄の清一が、挨拶しようとする

昭子を制して家の中に招き入れた。弟

の勝と同じくらしいの小柄な体格である。

「田畑町も昔は田んなかばっかしやつ

たばつてん、今はもう桜小路のにきま

で住宅が建つてしもうて、境目もなか

ごたあよ。」と居間に案内しながら清一

は義妹の昭子に話しかけた。昭子も意

味は通じるようで「ええ、新婚の時、

ご挨拶にお邪魔した頃とはまわりの景

色がすっかり違いますわ。」と標準語で

応じていた。

「お兄さん、凄いい日焼けだね。」

勝は、日差しが強くなる前の春にし

ては、兄の顔色が異様にどす黒いの

気になった。
「会社を辞めて晴耕雨読のせいと言いたい
たいが、正直言って肝臓がうつかんげ
たんだ。」
勝の横に座った昭子が、彼の膝の辺
りを軽く突いた。あらかじめ取り決め
ていた、要通訳の合図だった。勝は昭
子に意味が通じるようにフオロ―する
ことになっていた。
「えっ、肝臓の病気！」
「そうなんだ。会社勤めの頃も飲んだ
くれ、辞めてからも昔の色んな仲間と
寄合ばかりで飲んでこの様だよ。今は
禁酒し病院通いが日課みたいな生活に
なったな。最後の最後の日が来たらホ
スピスと行って痛みだけをとり除く治
療にするよ。何だか知らないが体に管
ばいっばいくっ付けてベッドに横たわ
る延命治療なんて真っ平ごめんだ。」と

無表情で言った。
「そうだね。ターミナルケアなんて、
終末医療は医者で大儲けさせるだけで、
患者本人は耐え難い人生の延長戦を苦
しみ通すだけだよ。人権とか人間の尊
厳をいうなら、自分の死は自分で選択
するか、信頼する家族に委託して然る
べきことだよ。」と珍しく勝が興奮した
口調になった。
「あら、久しぶりなのにみんな深刻な
顔をして好かんよ。」と兄嫁の咲江が近
所の手伝いの主婦達と料理を運んで来
た。テーブルの上は根菜の煮物、焼魚、
煮魚、刺身、鯉の洗、ポテトサラダ、
佃煮、漬物、巻き寿司、握り飯、汁椀
などの料理がテーブルからはみ出るほ
どに並べられた。「飲み物はビールに
しますか？」と咲江が訊いたが、兄は
「体に毒だからやめとくよ。勝は大丈

夫やろ？」と言った。
勝は「俺もこのところ体調がすぐれないから遠慮するよ。」と淋しそうに答え
た。
「じゃ、女三人だけでビールで盛り上
がりましたようか。」と町子がお通夜のよ
うな場の雰囲気を変えようと殊更に朗
らかな声をあげたら、咲江も昭子も
「ええ、女衆だけで飲みましようよ。」
と微笑んだ。兄と勝はウーロン茶で乾
杯した。咲江は、昭子と同じ年令であ
ったが、生れも育ちも小城の外れの三
里という根っからの田舎者を自称し、
化粧っ気もなく、都会育ちの昭子より
ずっと老けて見えた。
「凄く沢山のご馳走だけど、うちの主
人、すっかり少食で勿体ないわ。」と昭
子が申し訳なさそうに言った。
「田舎の料理ですから、にぎやかにお

膳を飾るのが仕来たりなのよ。残った料理は手伝ってくれた近所の奥さん達が持っていて帰んさあけん心配なかとよ。と咲江がビールを一気に飲み干して言った。
「若かった時分は、ああぎ、ああしこ食ったばってんが、もう腹がちよびつとしか受け付けんよ。」と兄が五目巻きの寿司をつまんで口に運んだ。昭子が例の合図で肘を使い勝の横腹を突いた。
「あれば、あるだけ食べた。」と彼女の耳元に囁いた。
「昭子さん、小城の刺身はおろいかばってん、その九州の海の甲イカの刺身ば口にしてみんなね。呼子のイカと違うばってんね。」とイカの刺身を勧めた。
「オロイカって、この白いイカの身ですか？」と昭子が訊ねたら、咲江も町子も吹き出しそうになり手のひらで口

先を押さえた。

「それは甲イカの刺身だよ。兄貴は唐津の先の本場の呼子のイカの刺身のように身が透き通っていないと言っているのだよ。」と標準語で説明して苦笑した。そしてそつと小声で、おろいかとは、品質が劣るという意味だと伝えた。

十九

「兄さん、俺は死んだら今流行っている散骨にしてもらうよ。」と勝が意を決して口に出した。

「勝さん、嫌ね。そんな話はまだ先の先でしよう。人生はこれからよ。」と咲江が顔を顰めた。

「義姉さん、俺の顔色に精彩がないの気づいているだろう。この年になって体調が悪いと、自然に葬式とか墓のこ
とが心に浮かんで来るんですよ。」
「正直言つて悪かったね。ちよつと老

け込んだと思っただけで、どこが
悪かと？」
「生まれつきの臆病者で、怖いから病
名は聞かないことにしたんだ。家族は
知っていているよ。」と勝が努めて明
く答えたが、義姉の咲江は気まずそう
にうつむき、昭子は眉を顰めて首をゆ
つくりと横に振った。
「生老病死は人間の定めだからな。咲
江も町子もそれから昭子さんも、女衆
はまだまだピンピン元気だから縁起で
もないと思うばってん、俺も病院通
いの身だから勝の気持ちには、よう分
かるよ。」と兄が小声でつぶやいた。
「勝が散骨にしたかなら、そぎやんす
れば良かやんね。宗教は理屈と違うけ
ん、極楽とか天国とか信心のことは、
信ずることがすべてじゃないか。俺は、
檀家寺に先祖代々というか、親父やお

ふくろも眠っているし、死んだらそけ
え入るしかなかよ。田舎の因習に突っ
張って、新しか形の葬儀ばしようなん
て考えてもおらんよ。としみじみと続
けた。
「兄さん、有難う。極楽浄土があると
か、ないとか口から泡を飛ばして論争
することじゃないよ。誰も行って見た
ことのある者はいるはずがないし、信
ずる者は救われるって昔からいう通り
だと思うよ。」勝は心弱って少々涙ぐみ
鼻水を啜り上げた。
「あんたは、子供の時に関東に出たん
だから、向こうに墓を持ってても誰も何
も言わんし、何もわざわざ小城で葬式
をあげることもなかとよ。ところで、
あんたが無宗教とか無神論にかぶれて
いるわけじゃないかとやろね。」と兄が尋
ねた。

「そんな難しいことを考える脳みそは生まれつき持っていないよ。俺は死ぬ間際には神様、仏様と拝んでいると思うよ。」と勝は答えた。健康な女三人は黙って病気の兄弟のやりとりで耳を傾けていた。長い廊下の向こうの若葉の庭に麗らかな春の陽光が燦々と照っている。た。二十翌朝、勝は南島卓三に電話した。「勝ちゃんかい。どけえおるとね。えっ、実家ね。今すぐ遊びに来んね。」と張りのある元気な声であつた。勝は昭子を実家に置いて一人で出かけた。後で、兄嫁が昭子を清水の滝とか北山ダムの方面に案内するという。南島家までは歩いて五分位の距離である。檜造りの豪勢な邸宅で前庭も広い。門柱の前に竹馬の友の卓ちゃんは待っていた。

すっかり白髪になつていたが、血色の
良い丸顔にやんちゃな面影が残つてい
た。
「中学校の卒業以来だね。」と勝と同じ
年と思えない若々しい幼友達であつた。
「十五の春に別れたきりだから四五、
六年ぶりかね。卓ちゃんの面影は変わ
らんよ。」
「うん。でもあんたはちよつとやつれ
て見えるよ。どつか悪かとね？」
「そうなんだ。検査入院して娑婆に戻
つたばかりでね。すぐに元気になる
よ。」
「そうだといいいね。まあ、立ち話もな
んだから家に入つてよ。」と南島卓三に
言われて豪華な応接間に通された。家
具調度品がきちんとした位置に整い、
他に人の気配はなかつた。
「奥さんや子供さんは？」
「家中の閑寂

さに勝は何気なく訊いた。
「かみさんは今朝から従姉妹仲間で大
分の九重温泉に行ったよ。ミヤマキリ
シマもまだ咲いとらんとに、女はおし
やべりが目的だから仕方なかよ。子
供は、大阪と博多にいて五月の連休に
は孫を連れて来るよ。」と嬉しそうに言
った。
「卓ちゃんは、中学出たら少年自衛官
になったたね。」と話を切り出したら、彼
は長々と来し方を語った。自衛隊は四
十才過ぎに辞め、陸自援護会の幹旋で
博多のビルメン会社に就職し病院の清
掃管理の仕事をしていたが、五十代の
半ばに父母を相ついで亡くしこの実家
を継いだという。彼のほかの兄弟は早
くに没し、姉妹はみんな嫁いでいるの
で、男の卓三が産土の実家に帰るしか
なかつたのだらう。父祖伝来の広い田

畑は地域の宅地化で大方売却したので、
金銭的には何不自由なく暮らせる結構
な身分であつた。
「自衛隊でどの位まで偉くなつた
の？」
「昔の軍隊でいう軍曹だよ。少年自衛
官でも、特別選抜の試験で幹部になつ
た者は大勢いるよ。しかし、防大卒や
大卒の幹部候補生から任官した者は、
最初から軍隊でいう少尉だから勝負に
ならんよ。」と現役時代を思い出したよ
うに溜息をついた。
「この町から同じ中学校に通つたのが
他に二人いたね。」と勝は彼に確かめた。
「そうだよ。藤崎と根本だね。藤崎は
定年まで船乗りをやつたそうだよ。世
界中の港で買い集めたのかね、佐賀の
街で骨董屋ばやつとる。実家は弟さん
が継いどるね。いつでも会えるよ。」

「そりゃ、会いたかね。」と勝も郷の方
言になつた。「根本の消息は全く聞い
とらんよ。実家も、もうなかごたあ
ね。」と言うと卓三は立ち上がって別の
部屋から古びたアルバムを持って来た。
小城の中学校を卒業時のアルバム帳だ
つた。
「あんた何組やつたか覚えとうね？」
と勝は訊かれた。
「ええと、何組だったかね。ちよつと
貸してよ。」とアルバム帳を手にした。
「ああ、岡田先生のクラスだからE組
だよ。」
「どれ、見せてみな。」と卓三はアルバ
ム帳を取り戻すと、男女約五十人の顔
を舐めまわすように一人ひとり点検し
た。
「小城高校に進学した、この野村洋三
は本町の羊羹屋だよ。小学校の時から

何回も同じクラスになったけん、お互
いよう知つとうよ。今から電話して一
緒に昼飯でも食おうよ。」
「俺はあんまり食欲はなかけど、野村
君には会いたいな。」と勝は答えた。
二一
小城市郊外の田んぼの中の一軒屋に
新装の和風レストランがあつた。正午
前だから駐車場には二、三台の車両し
かなかつた。
「ここの店主は京都の先斗町で板前の
腕を磨いたそうで、見た目に綺麗な料
理で味もなかなかのもの。と評判が良
いんだ。繁盛していて十二時過ぎたら混
んでくるよ。」と案内した野村君が説
明した。赤や黄のチュールIPPが行儀よ
く咲いている花壇の向こうに若緑色に
染まつた佐賀平野が一望できた。
「もういつペンアルバムば見せてよ。」

俺のこのアルバムは失うなってしま
うたよ。卓ちゃんは物持ちが良
いよ。」と野村君が卓三の手から
引き取った。勝は自分もこのア
ルバムは失くしたよう
に思った。
「あんたとは、あんまり話した
ことがなかね。」と野村君が勝
の顔をしげしげと見つめた。
「二人とも元気そうで羨まし
いよ。」お茶を飲みながら勝が
言った。しげしげと野村君の
顔を見つめ返したら、背の
高い瘦せた子でマッチ棒のあ
だ名があったのを思い出した。
「俺も棺桶に片足突っ込んで
るよ。何年も前から病院のお
得意さんたい。」と野村君が
自嘲的にヘッヘッと笑った。
「俺は、棺桶の中にしゃがんで
いるよ。」と勝が言ったら、二
人はそりゃひどいな、と高笑い
した。

「自覚症状はどぎゃんね。」と野村君が顔付きをあらためて尋ねた。「そうだね。還暦で人間ドックを受け
るまでは何も感じてなかったよ。検査結果の色々な数値の書き込まれた表や糖尿病という病名を知ってから気が滅入ったよ。戒名をもらった気持ちだよ。
その後で受けた精密検査の結果は女房と息子は知っているが、俺は聞くこと
を拒否したんだ。胸に痛みはないけど息苦しい気がして食欲が今一なんだ。
それに微熱があったり頭が重かったりするんだよ。」と勝は説明した。豪華な懐石料理が膳卓にしつらえられたが、健啖の二人の友に比べ、勝の料理を口に運ぶハシの動きは鈍かった。
「岡田先生は長生きしたけど、何年か前に老衰で死にんさったよ。」と野村君が言った。死という厳粛な言葉が出る

のを待ってましたとばかり、勝は今朝から胸につかえていたことをひと思いに吐き出した。

「卓ちゃん達に頼みたいんだ。」

「何だい、言ってみなよ。」と野村君がハシを置いて姿勢を正した。

「俺が死んだら小城の山に散骨してくれないかな。」

「家族や実家の人達に伝えてあるのかい？縁起でもなかばってん、友達だから望み通りにしてやるけど、事が事だけに、はつきりと俺達にも文書にしてくれないか。」と卓三も神秘的な表情で言った。

「家族には、もう遺書を書いたよ。卓ちゃんど野村君にも手紙で俺の意思を書いて送るから頼むよ。」

「卒業以来四十何年ぶりに再会したのに、いきなりこんな話かい。人生って

儚いもんだな。」と野村君は悲しみで曇った臉に指先をあてた。「自衛隊の知り合いに散骨をした者が何人かいたよ。昔の兵隊さんは山で死ぬか、野で死ぬか、海で死ぬか分からぬかい覚悟があつたから、遺骨とか墓に拘らない考えが自衛官にも引き継がれていている気がするな。骨よりか魂の抛り所の方に想いがあり、海や山の大自然に抱かれて眠りたいと考えているのだろくな。」と卓三は経験談を話した。「散骨って？法律はどぎやんなっていのかな？」と野村君が心配そうに尋ねた。「埋葬法が緩和されてくさ、人様の迷惑にさえならんぎ、海でんが山でんが何処へでん、宇宙にでん撒いて良かごととなつているよ。要するに良識の範囲ならどこでんが許されるくさ。」と卓三

が丸出しの佐賀弁で答えた。
「故郷の山っていうと、天山が良かと
思うけど、県立公園だから何か規制が
ないのかね。」
と野村君が心配した。
「役所なんかにいちいち相談したら、
せからしかだだよ。俺達だけで、よ
うしてへ黙っての意。骨ば、ばら撒い
たら誰も気がつかんよ。」と卓三が言っ
たので、「おい、ばら撒くのかね。」と
勝はあわてたように言った。
「いや、言葉の勢いで言っただけだよ。
実際は丁重な儀式として執り行なうよ。
何なら坊さんを連れて行って読経をし
ようか？」と卓三が提案したが「いや、
お布施がいるからいいよ。」と勝は断つ
た。「何事も金次第なんだな。」と野村
君が言っていて、始めて三人の哄笑が部屋
の壁に響いた。

三人が会食を終えて外に出たら、晩
春とはいえ、佐賀の強烈な午後の太陽
の輝きが遠く天山の山並みを照らして
いた。
二二
勝と昭子は、翌日の昼過ぎに茅ヶ崎
の自宅へ帰り着いた。勝は「ちよつと
休む」と寝室に直行した。やはり、病
中の身に九州への長旅は相当堪えたよ
うだった。夕飯には起きてきたが、ご
く少量のご飯とおかずを口にいただけ
で風呂に入ると就寝した。昭子は帰宅
した息子に小城の実家訪問の旅の様子
を聞いてもらいながら、ご飯が美味し
いとか、不味いとか位言ってくれば
良いのに、と嘆いた。
一晩熟睡した勝は、小康状態を取り
戻し、朝は普通に起床できた。ダイニ
ングルームの窓から望む朝空のよう

久しぶりに晴朗な気分になった。
「今日は薬をもらいに行く日だったな。
天気も良いし、ついでに江ノ島から富
士山をカメラに撮ろうかな。」と彼は妻
に言った。
「富士山を撮るなら午前中よ。午後は
光線の具合でぼやけるから、先に写真
を済ませ、それから病院に行きましよ
う。」と昭子が安心した表情を見せた。
勝は寝たり起きたりの生活になった。
天気が良く気分の良い日は茅ヶ崎海岸
の松林を越えて潮の寄せる浜辺まで散
歩した。五月の半ば、勝は昭子の提案
で気分転換に箱根の桃源台の温泉ホテ
ルに逗留した。昭子は、すっかり少食
になった勝に豪勢な夕食が勿体ないと
思ったが、「箱根の山奥の食卓に、今
朝ほどまで小田原の海で泳いでいたア

ジがもうタタキになっ
ている時代に生
きていて幸せだよ。と
長年の連れ合い
が目の保養だけでも料
理を楽しんでく
れていて嬉しかった。
勝は、先日
の約束通り、芦ノ湖の
青い湖面を望む机に
向かい、遠く故郷の友
の南島卓三と野村洋三
に散骨を依頼する手紙
を書いた。
自分の散骨を依頼する
重苦しい中身の
手紙は、一気には書けな
かった。彼が、
♪故郷へ書いてまた消
す湖畔の便り
♪と何気なく口ずさん
だら、「古風な
唄ね。」と昭子が笑っ
た。昔のヒット曲
『湖畔の宿』のメロデ
ィであつたから、
「高峰三枝子が唄った
湖は、群馬県の榛名湖
なのよ。」と彼女が言
つたら「そうか。ね。」
と勝は氣のない返事を
したが、
この唄の替唄に戯れに
、♪タコの遺骨
はいっ帰る、骨がない
から帰れない♪
とあることは二人とも
知る由もなかつた。

た。
明るく若い生命感に満ち満ちたみず
うみの彼方の新緑の山々の景色を眺め
ながら、おのれの臨終の後を託す文を
綴っていたら、おのずと彼の目頭が熱
くなつた。人は人の死を哀れ悼むが、
自分の死にも客観的になれることが、
幸せか不幸せかなことか分からなかつ
た。
横川夫妻は一週間余り、箱根の山の
ホテルに滞在した。ある朝、勝は洗面
所の鏡で衰えた自分の容貌をまじまじ
と見つめ、とみに頭髪が薄くなってい
るのに気がついていた。やはり、ガン
に罹患しているのだと確信したのであ
った。滞在中、夫婦間で余計な会話は
しなかつた。読書、昼寝、温泉浴、近
隣の散策、夜はテレビを見て、気まま
に過ごした。

「何事も自然体が良いよ。俺にもしも
の時でも延命治療はせずに、自然にし
てくれよ。但し、ホスピスとかいう痛
みの除去は頼むよ。」とこの滞在の間に
二度ほどは昭子につぶやくように伝え
た。
二三
六月になっても勝の寝たり起きたり
の日常に変化はなかった。雨季で散歩
に出る機会はめっきり減った。
「アジサイが綺麗だよ。今度の休みに
のり子とます子が泊りがけで来るから、
鎌倉の長谷寺までドライブしようよ。」
と久しぶりに早く帰って来た息子が言
った。
「その時の気分しだいね。」と昭子が付
け加えた。
「まあね、アジサイは道端にでも咲い
ているから無理はしないよ。人混みも

疲れるからなあ。と息子は嘆息した。
朝から雨が土砂降りの日、に勝の二人
の娘がやって来た。姉のり子は、自
宅の庭で摘んだというアジサイの花束
を抱えていた。
「よりによって、折角の休みに大降り
とは皮肉だね。」と息子は又嘆いた。
「お天気は仕方ないのよ。空梅雨だっ
たら、夏に水不足で大変でしょう。農
産物にも影響するのよ。雨の神様に感
謝しなくちゃ。」と妹のます子がしたり
顔で言った。
「それ位知っているよ。」と息子が口を
尖らせた。「アジサイの花には雨がよ
く似合うのも皮肉かしら。」と昭子が言
ったら、「しとしと降る雨の風情にア
ジサイは良いな。」と勝がようやく口を
開いた。
「パパ、元気そう。必ず職場復帰して

ね。と姉らしくのり子が励ましたので、
勝も病状を忘れ出来れば早く会社勤め
に戻りたいと思った。
アジサイの花は、大きな口の花瓶に
生けられ庭に面した廊下に置かれた。
外は庭石を叩く雨音が激しく、白々と
煙っていた。
「のり子、まだ腹は目立たないね。想
像妊娠じゃないよな。」と勝が訊いた。
「パパ、大丈夫よ。まだまだだよ。お医
者さんがはつきりおっしゃったから心
配しないで。」と自信満々に微笑んだ。
命の移り変わりという思念が又勝の頭
を掠めた。
「そうか、孫の顔を見るまでは死ねん
な。」
「あら、嫌だ。そんなこと言わないの
よ。」とあわてて昭子が彼の腕をつねっ
た。

雨音が一層激しくなり、家中の空気を震わせた。勝は皆に黙ったまま雨降りの模様を眺めようと席を立ち、ふと廊下の足元のアジサイの花瓶を見やっ
た。これがこの世のアジサイの花の見納めになるかなあ、との思いに襲われた。
二四 自宅療養の身の勝に盛夏の暑さは耐えがたかった。家の近所の散歩に出かける気力も萎えていた。土用の入りも間もないという頃、昭子の「ただ今！」と珍しく華やいだ声が玄関から聞こえた。外出先から帰って来るなり、真っ直ぐ勝が臥せっている寝室に入っ
て来た。
「勝ちちゃん、軽井沢の別荘暮らしよ。今年父も甥っ子もオーストラリアにバカンスだって。軽井沢の別荘は私達

が自由に使っているのよ。」と声をはず
ませた。甥っ子とは二代目の専務であ
る。別荘は、軽井沢といっても浅間山
の裏側にある北軽井沢で、行政上は群
馬県下になる。しかし、軽井沢駅から
車で約三十分と交通の便は良い。何度
か行ったことがあるが、標高千三百メ
ートルの高原の森林の中の別荘地であ
る。別荘の近くには大型のリゾートホ
テルもあった。
夜は冷え、朝晩が涼しいのは当然で
あるが、日中でも日蔭は心地よく、快
適な夏の別荘滞在の日々を横川夫妻は
過ごした。米や乾麺類や缶詰類などの
食料と日常の必需品は車に積んで運び
込んでいた。トマトなどの野菜類は、
昭子が散歩を兼ねて近所の朝市に日参
して入手した。鮮魚や肉が食べたくな
ったら、昭子の運転で軽井沢の町まで

出かけた。
「こんなにのんびりするのには結婚して
初めてだね。」と勝が持ち込んだ日本の
名勝の写真集をめくりながら妻に話し
かけた。
「ずっと、働き尽くめだったわね。勝
ちゃんのお父さんやお母さんが生きて
いた頃は、夏休みは八月のお盆に小城
に行くのが関の山だったわね。民族大
移動の大混雑の中をよく懲りもせず行
き来したもののよ。若さがあつたのね。」
「俺達の若い時は、高度経済成長の時
代だったから、実家の墓参りで僅か数
日の夏休みを潰してしまっていたな。」
「まとまった夏休みをとるようになって
たのは、この十年位よね。」
「あんたはテニス仲間や学生時代の友
達とあちこち旅行できたから良いよ。
俺なんか海外旅行は数えるほどしか

いし、国内だって見てないところだらけだよ。」

「これから行けるじゃないの。」

「うーん、元気だったからね。こうして

写真集で名所を訪ねているよ。」と笑っ

たら、昭子もほろ苦い笑顔を見せた。

勝は、気が向いたら二十分程度、近

隣の林道を散歩したが、戻るとひどく

疲れを感じて寝込んだ。眠れば回復し

たので気にしなかった。昭子は退屈を

持て余し、リゾートホテルのプールで

一泳ぎしたり、レンタルの自転車で鬼

の押出しや白糸の滝などの名所へ遠出

したり、車を運転して軽井沢の町まで

ショッピングを楽しむなどして気まま

な別荘暮らしを楽しんでいた。

二五

「今夜、ホテルの広場でミニ花火大会

よ。出かけてみない。」そんな八月半ば

のある日、昭子が、ホテルの案内板で見たといつて誘った。この夏季期間中に何回かやったみたいだけれど、今夜がラストの花火大会になると付け加えた。二人は、ホテル客ではないから遠慮して開催時間の間に広場に行ったら、芝生の広場は人の影で埋め尽くされていた。「花火は空中にあがるから、後ろでも十分に見物できる。」と勝は皮肉った。小型花火とはいえ、高原の空気を轟音で震わせ、夜空に一瞬描き出される艶やかな光の花模様は見物人に「うわあ、凄げえ！」などと歓声をあげさせた。勝もすっかり見惚れ「今のはガベラ、これは黄菊、これはひなげし、うわっ、パンジーだ、これはほおずきかな、これが枝垂れ柳だ。」など一々声を出して喜んでいた。ミニ花火大会

でごく短時間に終了した。別荘に戻りながら彼は「祭りの後って淋しいものだね。」とさっきまでの興奮はどこへやら、空しそうに昭子に話しかけた。パツと咲きパツと散る桜の花と同じで、花火は日本人の美学として国民に染み付いている。勝は萎えかかった気持ち、を奮い起こすように「一瞬輝いて、さつと消え去るこの潔さが日本人の好みなんだな。」と数歩前をすたすた歩く昭子に聞こえるように独り言を言ったら「華やかな宴の後は寂しいわね。」と立ち止まって答えた。

晩夏のある日、息子の勝一が別荘にやって来ることになった。軽井沢の駅までは、昭子が車で迎えに行った。

「八月も、もう終わるぞ。」勝が顔を合わせるや開口一番言った。

「この時期は食中毒が起き易いので、

いつも秋口近くに休暇をとっているよ。
弁当屋の仕事柄仕方ないさ。」と息子は
悟ったような口振りである。九月にな
った。早々に茅ヶ崎に連れて帰ると言
った。息子の話では、小城の兄の病状
が良くなかった。肝硬変が末期になっ
ていて、佐賀の強烈な暑さに自宅では
耐えられないと入院療養を余儀なくさ
れていた。それでも、彼岸過ぎには自
宅に戻り療養したい本人の意向だそう
である。

二六

「それにしても毛が薄くなったな。」勝
は洗面所の鏡の前で虚しく独り言を言
った。妻も息子も意識的に頭髮のこと
は言わないのだと悟った。昨夜は十五
夜の月ということで、昭子の提案で月
見をした。旧暦でいう八月の十五夜で、
中秋の名月だと思った。勝が散歩中に

近所の空地で見つけて刈り取って来た
ススキを花瓶に入れて廊下に置いたら、
秋風が穂先を揺らして家中に吹き込み、
月見の風雅な雰囲気が出た。空は雲の
流れが早く、月は時々雲の陰に入った
が、すぐに煌々とした姿で現れて庭中
を照らした。秋虫の集く声が絶え間な
かった。昭子とのやりとりが心中に蘇
えった。
「このお月さん、歪んで見えるよ。ま
だ欠けていて真ん丸じゃないよ。」と勝
が口を開いた。
「ええ、十五夜と満月は少しずれるこ
とがあるのよ。月の満ち欠けは約二
九・五でしよう。」
とっさの機転で昭子は口にした。まぎ
れもない白磁の皿のような大きな丸い
月が東の空に上がっていた。
「あんたは物知りだね。」と勝は感心し

た。
「いえ別に、テニス仲間の奥様に雑学
に強く、テレビのクイズ番組に出たこ
とのある人がいて、その方から聞いた
のを思い出しただけよ。」とさり気なく
言い訳しながら、昭子は夫の視力が脳
の腫瘍で異変を来たしていることを実
感した。
「勝ちちゃん、ナイフを取りにわざわざ
家に戻ったのね。」
「ススキの葉っぱは鋭くて、うっかり
すると手や指に切り傷ができるよ。俺
は田舎育ちで慣れているから大丈夫
さ。」
「でも、小さな怪我でも心配だから無
理しないで、私に言ってくれたら良か
ったのに。」
「病院の若造がそんなことを言ってい
るのか。」と勝は自分の免疫力が低下し

て いるのを悟った。
十 月 になつたら秋の天が透けるよう
に 青く高かつた。軽井沢から帰り、家
でゴロゴロ、ブラブラの相も変わらぬ
生活だった。仕事一本槍で趣味のない
閑人は始末に負えないものである。勝
は、茅ヶ崎の海を見たくなり午後から
散歩に出た。脚力が落ちたのが自覚で
きた。足元がおぼつかないのは何でだ
ろうか、と考えた。段差の微妙な感覚
をコントロールできないもどかしさが
あった。軽井沢への旅行で気がついて
いた。階段を昇ると高さの感覚がつか
めずつまづき、降りる時は、下ろした
足の感覚の強さによるめいた。階段で
は必ず手すりを掴むように決めた。ゆ
っくりとカタツムリのようなペースで
通称の加山雄三通りを海岸へと向かつ
た。松林を抜けて砂浜へ辿り着いたら、

どっと疲れが出て波打ち際まで行かず、
その場にへたり込んだ。
潮風は心地よかったが、息が荒く肩で
呼吸せざるを得なかった。小学生の時
に、運動会で小城の町中を走り廻され
たマラソンを思い出した。金魚鉢の中
の酸欠の出目金のように天を向いてパ
クパクと大口を開けて走り、誰か一人
が歩き始めたら、自分も走りを止めと
ぼとぼと歩き、終いには北小路から桜
小路に入る町角に立っていた担任の先
生に「オイ！いいから、もう学校へ戻
れ！」と回れ右させられた。
当時の運動会は、各町内対抗方式で
田畑町の人達の年寄りが何人か、自分
の町内の子がマラソンコースの桜小路
を走るのが応援するため田畑町の入口
まで出ていた。
「勝、途中で棄権したな。この根性な

しが！「勝君は走って来なかった、と
これらの爺様達から告げ口されたよう
で、帰宅するなり父から叱られた。今
となつては楽しい思い出であり、地域
の人間関係の濃密な田舎を懐かしいと
思った。息も落ち着き、そのまま紺碧
の茅ヶ崎の海を見つめ続けた。

二七

「兄貴は彼岸過ぎには退院するそう
だったな。」とハシのすすまない様子で
朝食をとりながら勝が言った。この頃、
食事の味覚が感じられなかったが、気
のせいだと思ひ言い出さなかった。

「人間って面倒臭いもんだな。」

「あら、どうして？」

「毎日毎日飯食つて、ヒゲ剃つての繰
り返しで嫌になっちまうよ。」

「生きるつてそんなことじゃないの。」
と昭子は困つたなと思ひながら、ポー

カーフェースで突き放した。
「兄貴が家に帰っていたら小城に行っ
てみるか。」
「そうね。気分が変わっていいかしら。
でも旅行は疲れるから、しっかり食べ
少し運動もして体力をつけてね。」と昭
子が励ました。確かに勝は氣力も体力
も衰えて九州までの長旅はもう無理で
はないかとの自覚はあった。十日ほど
前に、茅ヶ崎の海を眺めて以来、家で
寝たり起きたりの暮らしぶりだった。
外の空気を吸えば元氣が出るような氣
がした。
「秋日和とは、今日のような日を言う
んだな。」と勝は感じた。彼は、食欲の
ないままサンドウィッチを齧った後、
転寝から目覚め昼下がりの散歩へと出
た。妻は例によってテニスクラブへ出
かけていた。

北の方へと足を進めた。遠く丹沢の山並みの色が濃く沈んで、墨絵のようになり稜線がくつきり大空を画していた。雑木林の残る古い家並のある町に辿り着いた。土塀と土塀の狭い路地の両脇に真っ赤な彼岸花が咲いていたので足を止めた。石畳の奥に石の地蔵さんのようなものが見えた。自宅の近くに彼岸花の咲く道や石仏のある光景があつたなんて、何十年とここに住んで今始めて気がついた。俺にとって家なんて単にねぐらに過ぎなかつたのだ、と今更のようになんて思った。男なんて遠い見知らずの土地を旅行はしても、肝心の家の回りのことは何の興味も持たずに生きているものである。勝は、突然何の仏さんだろうと気にかかった。石畳の道をそろりそろりといった感じで歩いた。勝は、石仏

を 表 から 裏 ま で 舐 め る よ う に 見 回 し た 。
長 い 年 月 の 風 雨 に 磨 耗 し た 石 仏 で 彫 ら
れ た 文 字 も 不 鮮 明 で あ り 、 辛 う じ て 昔
の こ の 地 の 地 頭 が 洪 水 か 大 地 震 か 何 か
の 災 害 の 折 に 祀 っ た も の だ ろ う と 憶 測
で き る 程 度 で し か な か っ た 。 元 の 通 り
に 又 そ ろ り そ ろ り と 戻 っ た が 路 地 の 石
畳 か ら 通 り の 舗 道 に 降 り る 段 差 に 足 が
よ ろ け て 踏 ん 張 り き れ ず 転 ん で し ま っ
た 。 ち ょ う ど 通 り か か っ た 男 子 高 校 生
の 五 、 六 人 が 「 あ っ 、 爺 さ ん が 転 ん
だ ! 」 と 皆 で 高 笑 い し た 。
勝 は 、 恥 ず か し そ う に 起 き 上 が り は
し た が 、 人 の 不 幸 を 目 の 前 で 笑 い 飛 ば
す な ん て 、 人 間 と し て 惻 隠 の 心 も な い
の か 、 日 本 人 は 年 長 者 を 敬 う 美 徳 も 失
く し た の か 、 と 腹 立 た し く な っ た 。 大
体 、 人 間 の 脳 が 何 で も 乾 い た ス ポ ン ジ
の よ う に 水 気 を 吸 い 込 む 柔 軟 な 小 学 校

の下級生の頃に、ろくな情操教育もしないばかりか、例えば漢字などの数を一年次毎に一定数に区切って教える教育方法なんて愚劣の極みだ。一つの言葉を交ぜ書きにし、下級生に「漢字」を「かん字」と教えるなんて阿呆のすることだ。ルビという便利なものに思いを致さないのか。「夏は来ぬ」など昔の唱歌は歌詞が難しいから子供に教えないとは、イデオロギー亡者の確信的な言いがかりだ。それがこんな人間の間を形をした化け物をつくるのだ。小野道風の柳に蛙の故事はともかく、自然界でも鮎や鮭がより強い種を保存のために、皮膚をボロボロに擦り切らしながら、川波の高みへと遡上している健全な本能も知らないのか。勝は家に近づけば近づくほど憤怒がこみ上げて来た。

転んだ時に地面に手をついたので、
家に帰って気がついたら手の平の皮が
むけて血が滲んでいた。すでに帰宅し
ていた昭子が目ざとく見つけて、あわ
てて水洗いをさせ消毒し大きなバンド
エイドを貼った。

二八

そのこと以来、勝の外出には杖が必
需品になった。十月半ばの日曜日だっ
た。娘ののり子とます子が、それぞれ
亭主を連れて実家に遊びに来た。実際
は遊びというより、昭子からそれとな
く聞いている体調の芳しくない父親の
様子进行を伺いに来ていた。勝が、話に疲
れて寝室に休息をとり、中座したら、
自然と家族の話題が現実味を帯びたも
のになった。
「家はお墓がないから、墓掃除やお花
を買う必要もないわね。」と姉ののり子

が言った。お腹の辺りにやや膨らみが
感じられた。姉妹とも親に似て小柄な
体格であるが、脚だけは長く腰が高い
位置にあつた。
「先祖代々の墓なら小城の三間寺にあ
るよ。」
「九州は遠くて気軽には行けないわ。
パパの田舎には、小学生の時に一、二
回行ったきりよね。」とのり子がます子
に相槌を求めた。
「赤ん坊の頃には、おじいさんとおば
あさんに会っているみたいだけど、そ
れは覚えていないわ。」とます子が応じ
た。
「とにかく小城は暑かった思い出だけ
だわ。」
とのり子が言ったら「スイカが美味し
かったわよ。」ます子が付け加えた。
勝は、電車で来たという娘らの亭主

にビールをしきりに勧めた。二人とも多忙な商社マンで、連夜のような宴席で鍛えられ酒豪になったと笑った。「パパは散歩に杖が必要になったのよ。」と昭子が近況を説明した。「人間ってのは精密機械も顔負けだね。なぜかこの頃段差の感覚が苦手なんだが、昇り降りに杖で一度コツンと叩いておくと、足の裏が自然と着地するんだ。頭で考えている訳じゃないから神経の働きなんだね。」「でもお散歩は気をつけてね。」とます子が心配したら「散歩しないと足腰が衰えて痛し痒しなのよ。」と昭子が嘆き顔をした。「兄さんは仕事なの？」とのり子が勝「弁当屋にとって行楽の時期が勝負でね。お天気の場合で売上に影響するか

ら、材料の仕入れや生産ラインとも常に調整がいのさ。」と勝が答えたら「パパも大変だったのね。」とます子が同情した。「そうよ。私達夫婦を長年やっているのに、若いあなた達の方があちこちと旅行を一杯しているわ。」と昭子が恨めしそうに言った。夕方、仕事帰りの勝一と茅ヶ崎駅で待ち合わせし、久しぶりに一家水入らずの団樂を持った。駅のほど近くに、目の先の生け簀で泳ぐ魚をお好みに捌いてくれる料理屋であつた。勝には、折角のご馳走も味がしなかつたが、黙つてハシを動かし口に入れながら、愉快そうに談話を弾ませる妻や我が子等の話にじつと耳を傾けていた。

二九

十一月に入つた日の早朝、小城の兄

嫁の咲江から電話があった。電話を受

けて勝の寢室に入つて来た昭子の腫が

潤んでいた。

「お義姉さんからよ。お義兄さんが危

ないって。お医者さんが親族に連絡す

るように言つたそうよ。」

「そうか、俺もきついけど、這つてで

も行つて兄貴の死に目は見届けるよ。」

「勝一達は、後で来ればいいですね。」

「そうだね。俺達だけですぐ支度して

羽田へ行こう。佐賀便はもう間に合わ

ないから博多経由だね。」

「博多つて、福岡空港へ降りることで

すね。」とあたふたと旅の支度をしながら

ら昭子が確かめた。

「県立病院まで！」

秋日の午後の日差しを照る佐賀駅前

広場ののんびりしたタクシー乗り場で

あつた。都会のように並ぶ必要もなく
先頭のタクシーに乗った。
靈安室に憔悴した兄嫁の咲江と町子、
敏子の姉妹がいた。清一は一時間前に
ひきとっていた。兄嫁が「昨日の夕方、
医者から明日いっぱいが峠と告げられ
ていました。その時はまだ話が出来ま
した。明け方に血を吐いて意識を失く
してお昼過ぎに心臓が止まりました。」
畏まって一気に慣れない標準語で喋る
や否やワーッと号泣した。昭子も二人
の妹も貰い泣きをし、やがて号泣が忍
び泣きになった。命を奪った直接の病
名は心不全だそうであるが、死因は末
期の肝硬変であつた。清一には、二人
の息子がいたが、いずれも大手の会社
のサラリーマンで札幌と山形に赴任し
ていて急には動きがとれない様子で、
まだ到着していません。勝が帽子を

脱いで兄の遺骸に合掌した際、その禿
頭を見た兄嫁と妹達は、一瞬泣きやん
でお互いに顔を見合わせた。
「兄貴は、彼岸過ぎに帰ると言ってい
たが、帰れなかったのか。やつと亡骸
になつて帰るんだね。」と勝がつぶや
いたら又女達の泣き声が高くなつた。
「今日は友引なの。」と嗚咽を堪えて兄
嫁が言つて、皆これからの段取りとい
う現実を考えざるを得なくなつた。換
拶に來た葬儀屋にとりあえず靈柩車と
ハイヤーの手配を頼んだ。
三十
その葬儀屋は小城にも出先の店があ
り、祭壇や行事進行を頼んだ。田舎の
仕來たりで葬祭場は使わず、自宅で一
切が執り行われる。冠婚葬祭は、町内
会が総出で取り仕切る慣わしが昔から
途切れることなく続いてきた。都会の

ように簡略化せず、通夜、本葬、野辺
の送り、初七日、四九日と暦通りに進
められる。その都度お清めの酒と料理
が振る舞われて、喪中の遺族は畏まっ
てひたすら弔いのお客に頭を低くして
おくしかなかった。
慰懃な言葉遣いながらも、葬儀屋は
祭壇の写真のサンプルを示しながら、
遺族の名誉心、高名心などを、おだて
くすぐり商売上手に高額の段取りを勧
める。故人の在りし日の写真を集めて
スライドを作製し、ビデオがあれば編
集し、本葬で上映するという。
通夜のお清めの席では、卓ちゃんと
話し込んだ。最初は伏目で丁寧な弔意
の言葉を口にしていた彼も、酒が五臓
六腑に染みて来たたら、竹馬の友の言葉
になった。
「オリヨッ！勝ちちゃん、いつん間にか

和尚さんのごたあ頭になったね。」
「そうね。明日お経をあけてもいい
よ。」と軽口で応酬したが、卓ちゃんの
目には涙が光っていた。卓ちゃんが下
を向いて黙りこんだので、気まずくな
り勝の方から訊ねた。
「卓ちゃんは靈魂を信じとるね。」
「哲学や科学の理論ば言わるつぎ、返
す言葉は知らんばってん、俺は現に幽
靈を見とるよ。」と氣を取り直した卓ち
ゃんが話し始めた。
「えっ、本当かい。」と意外な返事に勝
は魂消た。
「自衛隊での話だよ。二十歳をちよび
つと出た頃やったかな、北海道の駐屯
地で同じ分隊にいた体のでっかい、よ
う肥えた奴さんが大酒呑みでね。俺も
酒好きだから仲が良かったんだ。仲間
数人で休暇で近くの温泉宿に一泊した

に　い　が　「　心　て　「　「　に　っ　い　聞　い　ん　さ　「　「　で　ん
な　出　念　そ　不　、　フ　そ　耳　て　び　こ　言　だ　ん　さ　「　「　ひ　だ
つ　し　を　の　全　後　ロ　り　を　え　い　だ　だ　ひ　奴
た　た　押　人　で　は　ン　や　当　ず　な　け　だ　く　さ
た　の　し　の　死　も　ト　、　て　な　残　け　一　緒　の　返　だ
。　か　た　幽　亡　う　か　ら　び　た　ら　し　静　か　り　良　か　気　分　で　わ　い　わ
　悲　ら　、　卓　ち　や　ん　は　当　時　を　思　勝　、
　し　み　に　沈　ん　だ　深　刻　な　顔　、
　に　な　っ　た　。

「いつ幽霊を見たんだい。」

黙り込んだ卓ちゃんに、勝は興味深々

となつて話の続きをせがんだ。

「話すけど、思い出しても気色の悪か

けん、ここにきに清めの塩ば撒いて

くれんね。」

卓ちゃんは子供の時から浪花節をう

なるクラスの人気者であり、演出がう

まいと思ひながら、勝は、早く続きを

聞きたかつたから、通夜の客に配つた

清めの塩袋を破ると周囲にパラパラと

散らし、ついでに卓ちゃんと自分の肩

などにも塩をかけた。卓ちゃんは、ウ

ンと大きくうなづくとき呼吸して

話を続けた。通夜の客も酒が入り宴た

けなわという周りの風情だった。

「奴さんの親父さんに頼まれたんだ。

鹿兒島の先の小さな島の出でね、奴さ

んの荷物をまとめて実家に送ったんだ。
たいした持ち物は持っくらんけん柳行
李位の化粧箱一つにまとめて送った
よ。」ここで昔を思い返すように一息溜
息をついてから話を続けた。
「しばらくして新任の隊員が俺の分隊
に配属になったけん、有志の四、五人
で連隊のそばの居酒屋で歓迎会ばやっ
たくさ。」
「そいぎい、出たとかい。」勝は背筋に
ぞくぞく寒気を覚え、思わず郷の言葉
で問い返した。卓ちゃんは意に介せず
続けた。
「畳の部屋やったね。新入りが南島士
長、と俺にコップを持つように注意し
たんだ。何やと思うてコップを見たら
斜め後ろの方からビールビンを持っ
腕が伸びていたんだ。」
「お酌だね。」

「うん、だから有難うと言ってコップ
を持ち上げたたら黄金色のビールが注が
れただよ。一口飲んでそいつの顔を見上
げたたら奴さんなんだよ。ニコニコ笑っ
て黙っているんだよ。」
「それで何か言ったのかい？」
「いや、声なんか出んよ。きゃーまぐ
れてへびっこり仰天して気絶しそうに
なるの意。腰の抜けたごとくなって、前
の新入りの方ば見て、ぼうっとしてい
たよ。」
「卓ちゃんは幽霊のお酌したビールを
飲んだのだね。」
「そうなんだ。しばらくして氣を取り
直し、恐る恐る振り向いたら、もうい
ないんだ。新人に、今の男どこへ行っ
たかと聞いたたら、この部屋から出て行
きましたよ、どここの分隊の人なんです
か、と言ったんだ。当時は制服のまま

飲み歩いていたらね。」

「足はあったのかね。」

「ああ、それも訊いたが、ちゃんと歩

いて出て行った、と言うたよ。」

「ほかの仲間は何と言ったんだい。」

「俺は、奴さんが出たよ、とお化けの

格好に胸の前で手をだらりとさげて言

ったんだけど、そんなの知らねえよ、

と笑い飛ばされたよ。俺と新入隊員は

現に間違いなく見たとによ。」

「悪酔いしたとでも思われたのかね。」

それからどうなった。」

「うん、俺は色々思案ばしたとよ。そ

うしたら、奴さんの蒲団袋ば押入れに

入れたままにして実家に送るのを忘れ

ていたんだ。運送屋にすっ飛んで行っ

て送ったよ。」と笑った。

「それからもう出ないのかい。」

「うん、小隊長に話して、隊の近くの

神社の神主さんを部屋に呼んで御祓い
ばしてもらったよ。」
「信じられないのは、幽霊が自衛官の
制服を着ていたという所だね。」と勝が
疑問を呈した。
「理屈じゃないかとよ。」
「人間は裸で生まれ、死んだら経帷子
なんか着せられるが、焼かれて残るの
は骨だけじゃないか。どこで幽霊が制
服を調達するとね。」と勝は理屈を続け
た。
「俺は心の問題だと思うよ。奴さんは、
仲の良かった俺の心の中に生きとって、
荷物を返してもらい、やっと成仏した
んだよ。」
「心とは精神の世界か。物質の世界じ
やないから、制服姿で現れても不思議
じゃないのか。」と妙に勝は納得した。
「あんた、疲れたごたあね。もう寝ん

しやい。
俺はもうちよつと町の衆と喋つて帰る
けんね。と卓ちゃんはお銚子を手にする
ると席を立つた。勝は、幼馴染の幽霊
談義にすっかり心を奪われたが、世も
更けており妻の昭子や兄嫁の咲江達に
通夜の番を頼むと、柩に眠る兄の清一
に念仏を唱え合掌を済ませて用意され
た寢床へ向かった。
三二
勝の寢付きは悪かった。南島卓三の
幽霊談義が真に迫つて脳裏を離れなか
った。人間の目に見えない精神世界に
あの世があるのかと考えたが、さつぱ
り分からなかった。しかし、兄の靈魂
が四九日の間、この世とあの世の境の
宙に浮いているといふ俗説を信ずるの
も馬鹿馬鹿しかった。医者から止めら
れている酒に、通夜の成り行きで若干

は口をつけたのがやがて利いていつし
か眠りに落ちていた。
「勝兄ちゃん、大丈夫ね。」と朝七時頃
末の妹の敏子が起こしに来た。「昭子
は？」と訊いたら、一番眠い明け方の
燈明の番をしてもらったから、もう少
し寝かせているとのことだった。本葬
の日であり、いつもと同じように気分
は優れなかったが、とにかく起きて顔
を洗った。食欲もなかったが、沢庵を
かじりご飯に味噌汁をかけて流し込ん
だ。
「夕べは大変だったね。」と敏子に言っ
たら、「田舎の葬儀はこんなものよ。」
と慣れたものであった。変化のない日
常だけに、人の死とといった厳粛な事実
は、お祭りのような非日常を醸し出す
のだろう。清一の二人の息子も昨夜遅
く到着していた。勝の記憶では、小学

生の時分の姿しか知らないので、成人
して立派な青年サラリーマンの二人を
目にしたら別人にしか思えない。月日
の流れは速く、自分もそれだけ年を重
ねているのだ、と改めて実感した。
雲ひとつない秋晴れの日だった。勝
が所在無く玄関先の道を行ったり来た
りして時間をつぶしていたら、タクシ
ーから息子の勝一と娘のり子、ます
子が喪服姿で降りて来た。子供の時に
来たきりだ、と三人とも口にした。
「道に誰も歩いてなかったし、俺には
死にそうに退屈なところだな。」と勝一
が言った。
「お前達は都会で生まれ、都会で育っ
たからそんなこと言うんだな。俺は、
ここで生まれここで遊びまわって育っ
たから、余生をこの郷で過ごしたって
平気だよ。あれが天山で、近頃夢によ

く出て来るんだ。」と子供達に指差して
教えた。
「あたし達にだって、湘南の海とか丹
沢の山とか故郷はあるのよ。」とます子
がしたり顔で言った。
「あら、良く来たね。さあ、早くお家
に入ってお義姉さん達にお悔やみを申
しなさい。」と家の中で子供達の声を聞
きつけた昭子が眠そうな目で出て来た。
三三
午前十時を回ったら、葬儀屋が来て
祭壇を作ったり供花を飾ったり、町会
の人が受付の準備に現れて慌ただしい
空気が漂った。やがて、葬儀の参列者
が三々五々集って来た。故人の血族・
姻族の親戚、それに遠縁の者や清一の
昔の仕事関係者や学校関係の友人は、
家の中に入ったが、田畑町の関係者は
座敷に面した庭先に遠慮して立ってい

た。家に上がった親戚でも、兄嫁の咲江の関係者が多く、勝には、ほとんどが初対面同然の面々だった。故人の兄弟として葬儀が始まるまで、一人一人に丁寧に会葬御礼の応対をした。午前十一時きっかりに僧侶が現れた。緋衣の住職に墨染めの衣の僧が三人付き添っていった。弔辞を読む者はいなかった。清一も会社を辞めて相当経っていた。しかし、会社での最終ポストも職長程度だった。ので、役員や部長などいわゆるお偉いさんの出席はなかった。祭壇中央には、『清匠院瑞運菓道居士』と墨黒々と手だれた運筆の白木の位牌が安置されていた。勝はいささか値段の高そうな戒名だと思った。やがて、読経が始まった。葬儀屋の勸めるままお布施をはずんだせい、秋の日の横川本家の座敷に、僧侶の終わ

りのないような音吐朗々たるお経が延々と誦された。勝を始めとして正座に慣れていた者は多く、時間とともに足がしびれて、しきりに身体を動かして、大半の頭が縦横に揺れる様子が顕著になっていた。お経が唱え上げられる間に、全員の焼香は粛々と済まされた。正午に読経が終わり、一旦僧侶が別室に退席したら、厳粛な空気が破られ、足を崩したり立ち上がって屈伸運動する者もいて、ガヤガヤと雑言が飛び交った。司会を担当する町会の役員が頃合をみて「ご静粛にお願いしま

す。」と何度か繰り返し、元の厳粛な空気に立ち戻った。弔電が数通披露された後、参列者全員が出棺のお見送りで玄関先の通りに出るように促された。そこで、勝は参列していた卓ちゃんと話ができた。

「まだ家によつては納骨の日に、家紋の入った幟を立てて遺影を先頭に檀家の寺まで行列で歩くよ。」と教えてくれた。横川家では、天山の麓の火葬場までついて行くのは喪主の咲子と二人の息子、それに弟の勝と妹の町子と敏子の身内だけで、靈柩車にハイヤー一台だけであつた。出棺に先立つ会葬御札の挨拶は、未亡人の咲江がする予定であつたが、憔悴が激しくすっかりやつれ果てた感じだったので、今朝になつて急遽長男が代役をした。ついで、ついでこの間まで子供だった清一の息子が、都会に出た大手の商社マンらしく、堂々としながらも手馴れた様子で謝辞を述べるのを、勝は人をおくも変化させる光陰とは実に不思議なものだといふ面持ちで聴いていた。永別のクラクションを一声高く鳴ら

して、たった車両二台の短い葬列はゆ
っくりと道を進んだ。ハイヤーの窓か
ら勝が目にしたのは、首を垂れ合掌し
実際に涙を流しているのは、田畑町の
住民や清一の墓、将棋仲間達の隣組の
衆だけで、縁戚の者達や会社関係者は
ほとんど無表情で形式的に合掌してい
る様子であつた。この地には土臭い濃
厚な地縁の人間関係が脈々と生きて、
いわゆるスロースライフの感覚が綿々と
継承され残っていて羨ましいと思つた。
身内が火葬場に出かけている間は、
身内の連れ合いの昭子や町子、敏子の
亭主らと、甥っ子、姪っ子らが、町会
の世話役と一緒になつて、大勢の会葬
者へのお清めの酒と仕出しの精進料理
の振る舞いで室内だけでなくゴザを敷
いた庭先まで動き回り大童になつてい
た。

いっつか、人数の多い兄嫁の親類などを中心に声高な祭りの宴となつていった。都会からやって来た昭子が奇異の思いで接待しているのを察したのか、町会の世話役の婦人が「田舎の葬儀は男衆の寄り合いですから、にぎやかなのが故人の一番の供養になるんですよ。」と語ってくれた。

三四

初七日か納骨の日まではと思つていたが、故人の実弟として精進落としの晩餐の接待などで、すっかり勝の体調は崩れてしまった。兄嫁の咲江は一晚寝たら血色も回復し元氣を取り戻していた。佐賀の地元の妹達や清一の二人の息子も長期の忌引休暇でしばらく実家に滞在するといふので、勝は最寄りの病院で栄養剤を点滴してもらい茅ヶ崎に帰ることにした。南島卓三にその

旨を電話したら「野村君が世話ば焼いて三年Eホームのクラス会ば開くと張り切って、あっちこちに連絡ば、しよるばい。名簿の出くっぎい、あんたのここにも送ると思うけん、元気にしとってね。」と言われた。

勝夫妻、息子、二人の娘は、夕方の羽田行の便に乗るのを、町子と敏子の運転する車に分乗して佐賀空港まで送ってもらった。田舎ほど公共の交通機関が不便で自動車と運転免許証は生活必需品である。

昭子に手を取られて空港のロビーを歩く勝の足取りはおぼつかなかった。

「お兄さん、身体に気をつけてね。」と町子と敏子は口々に心配した。どう見ても容貌は尋常でないほど衰えていた。

「これが今生の別れだよ。」と勝は搭乗ブースへの入り際に、精一杯の空元気

で軽口を叩いた積りだったが、妹達には冗談に聞こえず、人前も憚らずハンカチを目に当てて嗚咽した。羽田空港までは順調な空の旅であつた。羽田で飛行機を降りる時、勝の足には異状を來たしていた。萎えたように歩けないと訴えたので、素早く客室乗務員が車椅子を手配してくれた。「駐車場に車を置いてあるから持つて来るよ。」と勝一が車椅子を押しながら言つた。「明日、一番で先生に診てもらいましようね。」と昭子の顔も青ざめていた。三五翌朝、勝は気分が悪いと起床しなかつた。「息が苦しい。」と勝は昭子に言つた積もりだった。が、発声がもつれていて昭子はよく聞き取れず、食事中の息子の

ところがここに血相を変えて駆け戻ってパパ
が変だと伝えた。
「しまった。昨夜病院に直行すべきだ
ったな。」と勝一は即座に一一九番をダ
イアルした。
風の強い晴れた朝で湘南の海には高
波が海浜に白く砕けていた。救急車は
赤色燈を回転させながら警報音もけた
たましく、ラッシュ時の一般車両をか
きわけながら、海岸通りをかかりつけ
のT病院へと走った。付き添いの昭子
は夫の顔を悲しそうに見つめていたが、
勝一は後悔の念を面に顯にし、寂しげ
に窓の荒れた海の景色へ視線をやっ
ていた。
長い長い時間が過ぎたように感じた。
集中治療室から例の若い主治医が出て
来たのは午後になっただった。ロ
ビーで待機していた昭子達は放送で医

務室のデスクに呼ばれた。

「どうして私の承諾もなく九州へ旅行したんですか？」

「佐賀県の小城市まで、兄の葬式でした。」と昭子が答えた。

「そんな辺鄙な田舎まで！そんなところにご主人さんの病状に対応できる病院がありますか？」

「ええ、すぐ近くの佐賀市内には、大きな総合病院があります。」と今度は勝一が答えたら、医師は満面に怒色を露にし声を荒げた。

「私が言っているのはそんな問題じゃない。良いですか、前に言ったようにご主人の肺のガンが脳幹の枢要部位に転移し腫瘍が出来ていて開頭手術はほとんど不可能だと説明したはずですよ。

あなた方がご主人に何を話したか知らないけれど、自然のままにして基本的に

ホスピスを中心に投薬治療をしている
のでしたよね。医師も話しているうち
に、少し穏やかな口調になった。
「いくら身内のご葬儀でも、こんな長
旅はご自分の寿命を縮めるわけですか
ら、香典と弔電程度にし、奥さん達が
代理で出席すれば十分でしょう。違い
ますか？」とたたみかけて来た。昭子
と勝一は机上にぼんやり目を落とし黙
っていた。
「ご主人は脳梗塞を発症しています。
脳の腫瘍も花の蕾が開くように大きく
なっています。しばらくは緊急集中治
療で面会は謝絶です。私は医師で人の
命を救う責務がありますから最善のこ
とはします。」と決め付けるように言
う。
「それで主人の見通しは？」と昭子
がおろおろと尋ねた。
「ええ、当面は命に別状はないと考
え

ますが、言語障害や身体の麻痺が出る
ことは覚悟しておいて下さい。心肺機
能も落ちていきますから、酸素吸入など
の生命維持装置を外せないこともね。」
と憮然と能面のような顔で答えた。
「父は自然のままにしてくれ、と普段
からよく言っていました。」「と勝一
が口ごもった。医師は本気で怒った。
「私の仕事には、患者様の寿命を一日
でも一時間でも一秒でも生き長らえさ
せる責任があるんだ。やるべきことを
やらなかったら不作為による殺人行為
と言われかねないんだ。まして生命維
持装置を外したら殺人罪の犯人になる
んだ。」
「でも尊厳死が：。」と医師の発言を遮
って、勝一が反駁すると、昭子があわ
てて「もう止しなさい。」と息子を制し
た。

「だから、緩和治療をしているではないか。私にとってには、治療放棄と同然のことだが、あなた達の要望を受け入れた療法をしているのだよ。」と憤懣やるかたない表情であつた。

今後の看護はナースセンターに行き介護士と相談するよう、怒りで真っ赤な顔になつた医師から指示を受けた。

家に戻る車を運転しながら、息子は患者が元の健康な身体に戻ることがないといと百パーセント分かっている癖に、無駄な延命措置で儲けようとする商業医療だとブツブツ文句を言つていた。

三六

三日後に、病院から電話があり勝が特別室に移つたことを知らせて来た。

早速、妻の昭子と息子、娘二人は病院を訪れた。

「小城では、お友達や咲子さん、それ

に妹さんと話し込み、親戚の人達のみ
んなにお酌し、実の兄が亡くなったこ
とを忘れたように元気良く接していた
のにね。」と長姉のり子が言ったら、下
の妹のます子は「咲子さんの親戚の人
達って、みんな良い人ばかりだったけ
ど、田んぼから這い上がって来たよう
な感じだったわ。その折の無理が祟っ
たのかもね。」と悲しそうな顔をした。
「田んぼから這い上がった！それはい
けないでしょう。農作は瑞穂の国の根
本のことで、お百姓さんを馬鹿にする
亡国的な妄言よ。」と姉が妹を叱った。
昭子も「うちはお弁当屋さんよ。お米
が一番の命なのよ。二度と口にしては
いけない言葉よ。」とたしなめた。
「ごめん。弾みで口が滑っただけよ。
職業に貴賤はないし、生産の現場など
第一次産業の方達へは尊敬の念を忘れ

ていないわ。」とます子はあつさりと謝
った。
「今の世の中、株に手を出す者達を筆
頭に、手を汚さない綺麗な仕事ばかり
する者が幅をきかし、ヒルズ族などと
いって贅沢三昧な暮らしをしている。
こんな格差をなくしてくれる政治家や
知恵者が社会に現れないと、この国は
救われないよ。」と勝一も話を補足する
ように会話に加わった。
介護士の案内で諸注意を受けながら
勝の病室へ家族は入った。目にしたの
は酸素吸入など生命維持用の夥しい医
療装置類と色とりどりのチューブを全
身に付けベッドに仰向けになつて眠つ
ている患者だつた。
「今の段階では、身体は全く動きませ
ん。口も利けません。意識はあります
ので、目が覚めたら、こちらが話し掛

けることは理解できます。」と青年の介護士が説明してくれた。
しばらくして勝が目覚めた。視力がおぼつかないようで、大きく見張っているが全く無表情である。目の瞬きだけが出来ます。呼びかけて、話が分かっただけなら瞬きを二回するようについてもらんなさい。」と青年が補足した。
「昭子よ。分かったら瞬きをして頂戴！」と昭子がい詰めた様子で真つ先に声を書けたら、やや時間差を置いて勝が二度ゆっくりと瞬きをした。続いて同じように勝一、のり子、ます子、が繰り返した。
「文字は読めますか？」と切羽詰ったように昭子は青年に尋ねた。
「視力は相当悪いようです。霞んで見えていかも知れませんか。大きな字でなかったら無理でしょう。」

「テニス仲間の人のお母さんが、こんな状態になった時、平仮名の五十音表の指差しで、意思の疎通が出来たってことよ。今度聞いて準備して来ますわ。」と昭子が少し落ち着いた。しばらくくしたら、又勝は眠りに落ちたように目を瞑った。――当分は絶対安静ですから、点滴に催眠剤が入っているのでしょう。あんまり呼びかけても疲れませんが、どう致しますか？――と青年は暗に退出を促しているように家族は感じ取った。結局、完全に看護のことだし、日を改めて来ることにして、今日のところは病院を後にした。

三七

季節は秋冷の十月になっていた。勝の入院以来、昭子は病院への日参を欠かさなかつた。しかし、長年の連れ合

いの顔色を見る以外に、別にやることはなかった。食事は当初から咀嚼する筋肉が働かないので、鼻孔から食道へ管を通して高栄養剤が注入されていた。それともその内に腹に穴をあけ、直接胃に直接注入する装置がつけられるだろう、と介護の青年が教えてくれた。夫に好物を聞いて食べさせることも不可能なもどかしさも、日にちが経つにつれて消えていった。オムツや下着類などには使い捨てのもので十分であつた。全てが金銭で購えた。勝には、早く元気になつてお家に帰ろうね、そのうちに箱根の紅葉を見に行こうね、温泉で湯治しましょうね等と、虚しい慰めの励ましを言うしかななかった。意識はしつかりあるので、瞬きの返事を返したが、あまり長く続けると疲れて眼を閉じた。

明日にも、テニス仲間の奥さんが作
成してくれる五十音表が出来て、一緒
に見舞いに來てくれることになってい
る。夫が今何を考えているのかリビン
グウィルを知ることもできると思うと
僅かながら昭子の心も和みを覚えた。
一方、ベッド上の微動もままならぬ
勝は、夢現の中の震んだような濁った
意識の中で、盛大だった兄の清一の葬
儀の様子や竹馬の友の南島卓三が語っ
た靈魂談を思い返していた。思考力は
鈍っていたが、人間の目に見えない別
の世界があるようなことが氣になつて
いた。蓮の花の台のある莊嚴な極楽浄
土のイメージが膨らんだ。慈母のよう
な仏様の微笑がうたかたのようにな
に浮かんでは消えた。しかし、それら
のことを考えても脳の思考力が衰亡し
ているようで、いつしか意識を失うか

の ように 眠っ てしまっ ていた。疼痛の
緩和に モルヒネも使わ れて いた。
翌日、昭子 はこの ような 患者の 状況
を 看取 った 経験の ある 件の 婦人 を 伴っ
て 病室に 入った。勝 は 眠っ ていた ので、
二人 は 世間話 を しな がら 時間 を つぶし
た。やがて、勝 は 目 を 開 け た。
「勝ち ちゃん、今 から 平 仮 名 の 表 を 見 せ
る から、自 分 の 言 い た い こ と を 教 え て
ね。文字 を 指 で な ぞ る から、該 当 の 字
の と こ ろ で 瞬 き を 二 回 し て ね。」と 説 明
した ら 瞬 き が 二 回 返 さ れ た。
「ゆ っ く り と 指 を 動 か す の よ。」と そ の
友 人 は ア ド バ イ ス し、勝 の 顔 の 真 上 で
文 字 表 を か ざ し た。昭 子 は、『あ』の
文 字 か ら 行 を 縦 に な ぞ り、次 に 隣 の か
行 の 文 字 列 に 進 む と い う 根 気 の い る 作
業 に 取 り 組 ん だ。勝 は 趣 旨 が 理 解 出 来
て いた ので、該 当 の 文 字 の 所 で 二 度 の

瞬きをした。双方に根気のいることで、
もどかしかったが、休み休みに続けて、
長時間をかけて何とか勝の意思らしい
ものを把握できた。
『そうぎをたのむ、はかもたててくれ、
うめのき：』とやっこのことで二つの
フレーズを瞬きで示し三つ目の中途で、
疲れたように目を瞑ってしまった。
『葬儀を頼む、墓も立ててくれ、梅の
木？』って言ったのね。これってリビ
ングウィルって言うのかしら、梅の
木？家にもあるけど、それがどうかし
たのかしら。と昭子は連れの婦人に尋
ねた。
「普通にリビングウィルといえ、死
後に献体する意志とか延命治療拒否と
かターミナルケア拒否とか尊厳死の希
望とか、そうね、ポスピスなどの痛み
緩和治療の施しを文書にしておいて残して置

くことを言うんだけどね。」とその婦人は答えた。

三八

その翌日から勝は昏睡状態に陥り、再び覚醒することはなかった。昭子と勝一は医師に呼び出された。彼は、勝の病室で無表情に淡々と患者の現状を説明してくれた。生命維持装置を付けている限り、にわかに危篤になることはないという。昏睡しているけれど、心臓に異状はないから総合栄養剤を供給する限り生命は持続できる、と言う。「脳死と違いますか？」と勝一が訊いたら、瞳孔が反応し、痛覚検査にも反応があるので生体です、と答えた。「意識はありますか？」と昭子が訊いたら、外界に反応できる意識はあります。そんな感じが、夢くらいは見ているのじゃないですか。」と少し曖昧に返事した。

ふと勝一が父親を見たら、たまたま
目を開いていた。
「おや、苦しいのかな。痛みの緩和措
置をしましょう。目は開いていても、
患者さんには何も見えていませんから
ね。」と医師も気がついて言った。
その晩、昭子の連絡で、のり子とま
す子がそれぞれ夫を伴って茅ヶ崎の横
川家にやって来た。遅い夕餉の卓を囲
み、この家の主人の容態が報告された。
「パパのイメージした通りの人生の終
末にはならないようね。」と開口一番の
り子が言った。
「思い通りに行かないのが人生よ。昔
から、暗きより暗きに入る、という詞
へことば」があるでしょう。」と昭子が
うんざりした顔をした。
「それは、和泉式部の和歌で恋の道を
意味していますよ。」とのり子の夫が力

なく笑った。

「あら、そうだったのかしら。でも、恋に生き恋に死ねる人生って幸せよね。」と昭子が寂しそうに身内の顔を見渡をした。

「迷いに迷って生きるのが人生さ。」と勝一が言ったら、「結婚もしてないうちから、その台詞は早過ぎるわよ。」とます子が冷やかした。

三九

昭子は、昏々と眠りっぱなしの夫の病室を訪れはしたが、その訪問の頻度は日に日に衰えていった。いわば生ける屍を見るだけでは何の慰めにもならず、逆に辛い思いに苛まれるだけであ

った。

いつとはなしに菊の花咲く時節も過ぎてしまった。テニス仲間から見舞いの品物を幾つかもらっていたが、夫に

見せても分かうはずもなくて口惜し
かった。勝の容態は安定していて、昭
子は旅行でも観劇でも好きなようにし
ようと思えば出来ただろうが遠慮した。
所在無く、勝の居間の整頓や掃除で気
晴らししていた時に、何気なく開けた
手提引出の中から遺書と表書きした封
書を見つけた。糊で封緘してあるので
開封する訳には行かないが、身内の面
前で開く日はそう遠くないだろうと思
った。夫の死ぬ日が来ることが厳然と
実感を伴って襲い、昭子は身の毛がよ
だっ思いになった。
月日だけは正確にめぐり、鎌倉の紅
葉便りもなくなる。と茅ヶ崎も時雨れ
日が多くなった。
「ママ、師走だね。落ち葉が凄いいよ。」
珍しく早く帰宅した勝一と夕食のテ
ブルを共にした。窓外は木枯しが吹き

荒れていた。

「今日、病院に行ったけど、パパの様

子に変わりはないわよ。」

「元のパパに戻るのなら張り合いがあ

るけど、病院への出費がかさむばかり

だね。」

「パパが折角せっせと稼いで貯めたお

金を、自分の身体のために吐き出して

いるのだからしょうがないけど。」と昭

子は半ば愚痴って息子の顔を見た。や

はり、勝一も納得のいかないような複

雑な表情で黙っていた。

「仕事は順調のようね。」

「うん、景気が回復傾向で売上は右肩

上がりが続いている。僕が出したアイ

デアの『海の幸、山の幸弁当』がヒッ

ト中だよ。」

「じゃ、ボ―ナスが楽しみね。」やっ

和んだ親子の会話ができた。

横川家の寂しい母子二人の正月が過ぎた。正月明けにのり子が無事に男児を出産した。勝の初孫だったが、知らせる術もないのが昭子にとっても娘にとっても空しいことだった。母子が退院した日に、昭子は長女の嫁ぎ先を訪ねた。都心の一LDKのマンションである。一階で小さな庭があり、日溜りに水仙の花が白く一叢咲いていた。

「おじいちゃんに似ている気がするし、おばあちゃんに似ている気がするのよ。」とのり子は屈託なく笑った。

「まだ生まれたばかりよ。赤ちゃんに人相が出るのはこれからよ。名前は誰に頼んだの？」

「新潟のお義父さんよ。」

「勝虎って戦国武将みたいで凛々しい

わ。今の流行で犬や猫のペットにつけ
るような名前じゃなくて安心したわ
よ。」
「パパの勝の文字に、上杉謙信の本名
の長尾景虎を重ね合わせた、と電話で
おっしゃってたわ。」
「変わった芸名みたいな名前をつける
と、苦労するのはその子本人ですから
ね。勝虎って、とっても強そうで良い
名よ。早速写真を撮って病室に飾って
おきましたよう。」
「でも当のパパには何にも分らない
のが口惜しいわ。」
目を瞑った乳児の写真が、小さな額
に納まって勝の眠るベッドのそばに飾
られていた。窓の外には寒々とした冬
の海が広がっていた。
来る日も来る日も曇り空で、時折小雪
が散らついていた。一月下旬の日曜日、昭

子と勝一は寝たきりの勝のそばにいた。

「今年は寒が厳しいね。」と勝一が言っ
た。

「九州も平年より寒いそうよ。咲江さ

んが電話で言ってたわ。」

「小城も寂しい正月だったんだね。」

「でも近くに縁者がいっぱいいらっし

やるから心配ないわよ。」

「親父の血色少し悪くないか？」

「さあ、私はちよくちよく顔を見てい

るから、特別に変化は感じないけど。」

と昭子は夫の顔をしげしげとのぞき込

んだ。

「本当は連れて帰りたいんだけど、こ

の状態じゃ如何ともし難いっていうや

つだな。」と勝一は首をすくめて苦笑す

るしかなかった。

四一

立春が過ぎ、横川家の庭の白梅の蕾

が数輪開いた。
「こんなに寒いのに木は正直だね。春
が来たのを告げているよ。」出勤前に朝
食をせわしげに掻きこみながら勝一が
窓に目をやった。
「この家を建てた時の記念樹よ。主人
がいなくても咲くのね。」と昭子は恨め
しそうに言った。
この梅の花が満開になった二月半ばの
冷え込んだ朝、T病院から呼び出しの
電話があつた。昭子は勤務先に着いた
ばかりらしい勝一を呼び戻し、病院で
落ち合った。主治医の若い医師から、
勝の不整脈が一向に安定せず、心臓も
弱っているもので、今のうちに親族に面
会させるように指示を受けた。
「ママ、すっかりしてね。何もしなく
ていいから、パパを見守っていてよ。
僕がみんなに連絡するからさ。」と勝一

は落ち着いて携帯電話を手にと、
まだ寒い潮風が吹きつける病院の海の
見える庭園に出た。
昼前にのり子が悲痛な顔で病室に現
れた。赤ん坊は、新潟からお義母さん
が出て来ているから大丈夫とのことだ
った。少し遅れてます子も覚悟をした
表情で夫と一緒に病室に入って来た。
「パパの生きている姿を見るのも、こ
れが最後になるかも知れないのよ。」と
娘達の顔を見て昭子が泣いた。長女も
次女も黙って目にハンカチを当ててい
た。
「咲江さんも町子さんも敏子さんも福
岡空港で落ち合い一緒に羽田に着くつ
て。」と勝一の携帯電話に連絡が入った。
勝一が羽田空港まで出迎えた。勝は、
医師の手当てで一旦小康を取り戻した
ので、昭子はナーースセンターに告げて、

病院の喫茶室で小城からの兄嫁達を待つことにした。午後四時半過ぎに、昭子は病室に戻るようアナウンスする院内放送を聞いた。いいよいよその時が来たのかという緊張が母娘達に走った。病室に急行し、医師とナースが懸命の医療措置を行っているのをじっと見守った。勝に何の苦悶の様子はなく、やがて心臓の動きを示す機器の液晶画面のラインがフラットになった。横川勝がこの世に生を受けてこのかた六十余年、絶え間なく働いて来た心臓は静かにその鼓動を止めたのであった。「ご愁傷様、ご臨終です。午後四時五十分です。」と若い医師らは昭子らに深々と頭を下げると室外へ出た。やがて、係員が来て慰勲に遺族は霊安室の控え所で待つように言われた。午後六時頃、勝の亡骸が綺麗に死に化

粧を施され靈安室に運び込まれた。

その時、勝一が咲江らを案内してや

つて来た。

「一足間に合わなかったのね。」と彼女

らは無念そうだった。

「四時五十分でした。」と昭子が堪え切

れずに号泣した。その場のみんながひ

としきり貰い泣きをした。葬儀屋はそ

ばにじっと待機して、いつ遭族に言葉

をかけようかと狩をする猫のようにタ

イミングを図っていた。

四二

勝の遺骸は、靈柩車で茅ヶ崎の我が

家に帰って来た。名のみのも早春の深い

宵闇の中に梅の花の咲いた辺りが、そ

こだけ白く浮きあがって見えた。勝は

葬儀屋の手を借りて、自分の寝室に寝

かされた。

これから葬儀の打ち合わせをするよ

う、葬儀屋に鄭重な口調で促された。
「みんな揃っているから遺書を公開し
ます。」
と落ち着きを取り戻した昭子が毅然と
して告げた。封書に鋏が入った。そし
て便箋一枚をみんなで回し読みした。
単純明快に、相続は法定の通り、葬
儀不要、墓不要、戒名無意味、遺骨は
小城の山に散骨せよ、との簡単な文面
であった。立ち会っていた葬儀屋が渋
面になった。
「ところがこれだけじゃないのよ。こ
れってリビングウィルかしら？」と昭
子が入院中にまだ意識のあった勝から
平仮名の五十音表を用いて聞き取った
例の紙片をみんなに回した。
平仮名ばかりだが意味は、葬儀を頼む、
墓を作れ、梅の木、ということで、梅
の木のことは意味不明だが、他は遺書

の内容と明白に矛盾している。

「法的には遺書の方が有効ですが、ご本人の意思を尊重なさるんでしたら、入院中のものが本当のお気持ちでいらっしやると存じます。差し出がましいことですみません。」と葬儀屋が言葉と裏腹に無遠慮な態度で発言した。

「葬儀屋さんは商売一番ですからね。」と勝一が皮肉った。

「滅相もございません。」と葬儀屋は恐縮してみせた。

「では、こうしよう。親父は休職中とはいえ、現職の会社の部長です。社葬の対象ですよ。でも身内としては遠慮して密葬にしましょうよ。」と勝一が長男らしく決断し、その場のみんなが納得した。

「密葬でしたら早々に葬祭場併設の火葬場を手配します。細部は明朝に打ち

合　　わ　　せ　　し　　ま　　し　　よ　　う　　。　　と　　葬　　儀　　屋　　も　　引　　き　　揚
げ　　る　　素　　振　　り　　に　　な　　っ　　た　　。　　
「　　会　　社　　も　　長　　く　　お　　勤　　め　　し　　た　　か　　ら　　、　　ど　　こ　　か
ホ　　ー　　ル　　を　　借　　り　　て　　お　　別　　れ　　会　　を　　し　　ま　　し　　よ
う　　。　　と　　昭　　子　　が　　言　　っ　　た　　こ　　と　　に　　誰　　も　　異　　存　　は
な　　か　　っ　　た　　。　　
「　　問　　題　　は　　墓　　だ　　ね　　。　　い　　ず　　れ　　靈　　園　　は　　買　　わ　　な
い　　と　　い　　け　　な　　い　　が　　、　　親　　父　　は　　遺　　言　　通　　り　　散　　骨
で　　良　　い　　よ　　。　　と　　勝　　一　　が　　言　　う　　と　　「　　小　　城　　に　　見
え　　た　　時　　も　　、　　亡　　く　　な　　っ　　た　　主　　人　　に　　散　　骨　　の　　話
を　　し　　て　　い　　ま　　し　　た　　わ　　。　　と　　咲　　江　　が　　言　　っ　　た　　。　　
「　　モ　　ル　　ヒ　　ネ　　で　　朦　　朧　　と　　し　　て　　い　　た　　時　　の　　意　　思
よ　　り　　、　　ま　　だ　　脳　　の　　思　　考　　が　　健　　全　　だ　　っ　　た　　時　　の
パ　　パ　　の　　遺　　書　　を　　尊　　重　　し　　ま　　し　　よ　　う　　か　　？　　」　　と
昭　　子　　が　　妥　　協　　し　　た　　ら　　「　　分　　骨　　と　　い　　う　　の　　も　　あ
る　　わ　　よ　　。　　と　　ま　　す　　子　　が　　口　　を　　出　　し　　た　　。　　
「　　小　　城　　は　　遠　　い　　し　　、　　こ　　ち　　ら　　の　　靈　　園　　に　　も　　パ
パ　　の　　遺　　骨　　が　　残　　っ　　て　　い　　た　　方　　が　　、　　お　　参　　り　　の
甲　　斐　　が　　あ　　る　　わ　　よ　　。　　と　　の　　り　　子　　も　　妹　　に　　加　　勢

した。
「信仰って、気持ちの問題だからね。
墓に親父が眠っていると思えば眠って
いるし、その逆に、墓になんかいるは
ずないと割り切れれば、単に自己満足し
て、自分を慰めているだけのことだと
思うよ。」と勝一が反論した。
「私達は嫁いだ身だから、横川の家を
継ぐ勝一さんの決めたことに従うだけ
よ。」とのり子もます子も争う気はなか
った。
「分骨なんて嫌だな。親父の魂まで碎
いてしまうようで。俺達は湘南の生ま
れで、いわゆる田舎を持ってないじゃ
ないか。たまには、親父の眠る故郷の
小城の山を拝もうよ。」と勝一が言っ
た。「そうよ、そうよ。たまには佐賀に
いらっしやい。」と咲江も町子も敏子も
口を合わせて言った。それは、昭子に

も異存なく「幼な友達の南島さんにも
散骨を頼んだと言っていたいましたわ。」と
息子に賛成した。
「それにしても、梅の木とは、パパは
何を言おうとしたのかしら。」とのり子
が不思議そうだった。
「この家を建てた記念の梅を大事にし
ろ、という意味かな。それとも墓のそ
ばにも梅を植えろってことかな。」と勝
一は推理した。
「家にも古い梅が何本かあって、毎朝
のようになぐイスが来て鳴いています
わ。」と兄嫁の咲江が言った。
結局、梅の件は意味不明で、人生は迷
い迷いて生きるもの、横川勝は人間ら
しく意識の最終まで迷いを残した、と
いう昭子の説明でみんな納得した。

四三

翌日、近所の寺の黒袈裟の僧侶に枕

経をあげてもらい納棺された勝の亡骸は、白梅が満開の自宅を出ると、最寄りの火葬場で近親の者だけ列席して茶毘にふされた。その後、その火葬場内の葬祭室で緋衣の僧侶に読経してもらい、骨壺に入って帰宅し居間に安置された。全て葬儀屋の手刷れた段取りで滞りなく終わった。如月の空は紺青の奥底まで澄み切っていて、梅の花の白さが目に沁みる一日であった。と兄「では散骨の日に会いましょう。」と兄嫁達は九州へ帰った。

昭子と勝一は会社の総務課と相談し、約一週間後に、藤沢市のホテルの一室で、会社主催の『お別れ会』があった。勝が元気だった頃のにこやかな顔写真を遺影に掲げ、社長以下の主だった役員や従業員、それに取引関係者、昭子の親族、勝一の学生時代の友人達ら、

のり子夫妻とます子夫妻とそれぞれ
親族らの大勢の出席で、肅々と式典は
進められた。あらかじめ準備した勝の
在りし日のアルバム集からピクアッ
プしたスライドや編集したビデオを上
映したので、故人を偲ぶ空気が重々し
く会場を鎮めて、単なる弔問営業に止
まらなくて良かった、と昭子達は思っ
た。
遺骨は勝一の友人を通じて、横浜の
散骨協会にグラインド（粉末化）を頼
んでいた。二月の末にその引渡しを受
けた。白木の箱の中に紙製のまるでア
イスクリームのような容器が数十個詰
まっていた。粉末にすると遺骨の量は
ずいぶん減るものである。この容器は
すぐに水に溶けて土に沁み込んでしま
う。水溶紙でできている、このことだっ
た。勝一は、この半月足らずのうちに

すっかり形を変えてしまった、父とい
う人間の存在と無と、いうことに心を蝕
まれ、胸に大きな空洞があいたような
気になった。しかし、人生全般をそん
な儚い観念に感じ取るには、彼はまだ
若過ぎた。
昭子が、小城の南島宅に電話をかけ
たら、妻が出て「主人は台湾に旅行で
三月の初めに帰って来ます。お話は伺
っていますので、こちらから電話させ
ます。」と丁寧な返事であつた。
四四
三月一日の夜に南島卓三から昭子に
電話があつた。
「今度の土、日の休みの日に来られま
すか？同級生にも声をかけます。今年
は佐賀も寒いですよ。厚着で見えた方
が良いでしょ。」と彼はきちんとした
標準語で話した。勝一もそばにいたの

で、即座に承諾の返事が出来た。そして、兄嫁の咲子をはじめ町子、敏子にその旨を伝えた。

佐賀空港でレンタカーを借り小城の田畑町へ向かった。散骨という弔いの儀式を行うので、昭子も勝一も喪装のまま茅ヶ崎の家を出た。勝一がハンドルを握り助手席の昭子の膝の上に白木の箱が濃紫の無地の布で包まれていた。

つい先日のお別れ会に掲げた遺影の額は大きいので宅配便で別送していた。

約束の時間に横川の本家に到着すると、町子、敏子も夫連れで待っていた。

咲江の連絡で南島卓三が花と香典を持ってやってやって来て、昭子と勝一に弔慰を述べ、床の間の遺影と白木の箱に合掌した。

「明日は、日曜日で道が込むから早朝に出発したいと思います。勝君の手紙

では、小城の山に散骨を頼むとしか書
いておりませんが、やっぱり一番高い
天山にしまししょう。」
「登山するんですか？」と昭子が心配
して口を挟んだ。
「ええ、登山には違いありませんが、
今は車で山頂まで行ける道路がありま
す」と南島卓三は逞しそうな顔に苦笑
を浮かべた。
「学校の遠足では、晴田や岩松の天山
神社の麓の一番下から山の天辺まで、
全部歩いて登ってほんにきつかったで
すよ。」などと咲江、まち子、敏子が子
供の昔を思い出し、口々に顔を見合わ
せて言った。
「朝の七時位にはここを出ましよう。
友人関係で山まで行くのは、僕と野村
君の二人です。勝君の中学の同じクラ
スの者が、昼前までには僕ん家（ち）

に集まることになりました。とりますけん、そこで又儀式ばやります。と南島卓三の言葉に郷の言葉が混じった。ほかに天山まで散骨に参加するのは、昭子と勝一のレンタカー、町子と夫の車、敏子と夫の車で、咲江は昭子達と一緒にすることが決まった。コースは南島卓三らの車が先導し、かつて勝が学んだ小学校、中学校の校門の前をめぐる、小城の街並みを抜けて、清水の滝から峠越えをして古湯温泉を経由し天山山頂の裏のスキー場へと向かうことにした。

「千メートルの山の上は寒かですけん、風邪ば引かんごととして下さい。」と注意して南島卓三は引き揚げた。

四五

暦の上ではもう春であるが、三月の朝の天山山頂は凍てつくような寒さだ

った。山頂に雪はなかった。

「これが阿蘇惟直の墓です。鎌倉時代の南朝方の武将で、戦に負けてここまで逃げのびたんですが、この天山の下は北朝方の千葉氏の城下で進退窮まり、一族郎党ここで自刃して果てたと伝わります。」南島卓三が昭子と勝一に説明すると、「卓ちゃん、観光ガイドもすつとね。」と野村君が冷やかした。

武将の墓のそばを降りて、しばらく南側の斜面を下ると大きな窪地に深い雪が残っていた。

「ここにしましやう。」と南島卓三は勝一から白木の箱を受け取ると蓋を開けて合掌した。

「この雪の中に埋めて下さい。」と勝の遺骨の粉末が入った容器を四、五個ずつ先に昭子ら身内の者に手渡した。彼も野村君も残りの容器を手に取りと残

雪の中に埋めた。
ものの数分で横川勝の雪の中への散
骨は終わった。足下はるかに故人が少
年の日々を過ごした小城の街並みと見
渡す限りの田園風景が朝の光に照らさ
れて広がっていた。
「あの遠くに光るのが有明海です。」と
南島卓三は言う。と持参したラッパを口
にした。自衛隊の時に少々的心得があ
った。ラッパの開いた口から葬送と鎮
魂の調べが嫺々と吹き奏でられ、天山
の山嶺一帯に悲々と響き渡った。散骨
を終えたみんなが、勝の魂の昇天を現
に見ているかのようにな、我知らずのう
ちに青い天を仰ぎ合掌した。小さな綿
雲がひとつ僅かずつ西の空へと動いて
いた。
散骨に参加の全員が南島家に到着し
たら、すでに、故人の中学三年生の時

のクラスメートらが座敷に集まってい

た。

四六

「みんな玄関先に出てくれんね。」と南

島卓三は呼び集めて、「横川勝君の遺

族の方々です。」と昭子達一行を紹介し

た。勝一が胸に掲げた遺影にクラスメ

イトらが合掌し、「ご愁傷さまでし

た。」こもごも口にした。往時の男子が

四名、女子が六名来ていて、いずれも

佐賀県内に居住とのことであつた。

「さつき、アルバム帳を見せてもらい、

やっと横川さんを思い出したわ。この

人と遊んだり、口を利いた覚えはない

わ。」と女子の一人が言った。

「昔は、男と女子へおなごは一緒に

遊ばんやつたし、口ば利くなんて、め

ったに無かつたやんね。」と野村君がし

みじみと言つたら、みんな口々に「そ

うだったね。」と応じていた。

「僕は中三の時はクラスが違ったけど、同じ町内だから、よく一緒に学校に通ったよ。卒業以来、到頭会わずじまいになったてしまいい口惜しいよ。寂しいなあ。」と元船乗りだった藤崎君が遺影を撫でながら涙声で語りかけたら、クラスメートの女子達が貰い泣きに咽んだ。

南島卓三の先導で、全員が屋敷の裏手に回った。枯れ枯れの田んぼがはるか野末の丘陵まで続き、春浅い天山の峰が正面に聳えていた。

「今年は珍しく山に雪が残っているわね。勝兄さんが茅ヶ崎に行くのを、家族全員で見送った年も、天山は残雪が多かったわね。」と町子が敏子に話しかけたら、「勝兄さんも列車が来るまで天山をじっと眺めていたわね。」と目に涙をいっぱい溜めていた。

「では、同級生は天山の方を見て整列
して下さい。」と南島卓三は遺族関係者
と同級生を分け、おもむろに前に出る
と語り始めた。
「先程、こちらのご遺族の方々と天山
に登り、横川勝君を散骨して参りまし
た。山頂の阿蘇惟直の墓のすぐ下の残
雪の中に埋葬致しました。いわば、天
山が横川君の墓です。小城では使いま
せんが、流行の佐賀弁で言えば、がば
い墓です。残りの雪が墓標です。桜の
花が咲く頃には溶けて消えてしまいう墓
標です。横川君は雪と共に解けて故郷
の土に返って永久へとわくの眠りにつ
くことでしょう。これから、横川勝君
の御霊に黙禱を捧げましょう。では、
故人のご冥福を祈って、黙禱！」と号
令した。

同級生も昭子ら遺族関係者も、天山

の 高嶺の残雪に一旦眼を向けると、す
ぐに首を低く垂れた。
黙禱が終わると、アコ―デイオンを
抱えた藤崎君が前に出て、野村君は歌
詞の印字されたコピー用紙を同級生に
配った。
「それでは皆さん、みんなこんなおん
じさんとおおばちゃんになつてしま
いました、が、中学生の昔を思い出し
ら、校歌を歌つて故人の野辺の送りと
しましように。」と南島卓三の音頭で中
校の校歌を斉唱することになった。
「校歌なんて久しぶりね。上手く歌え
るかしら。」などと同級生は口々に言
合い、「卓ちゃんは、口上が上手いね。
子供の時から浪花節が上手だったから
ね。」と野村君までが冷やかかし、座が
ささか騒めいた。
「ご静粛に、遺族の方々はご清聴下さ

い。」と

南島卓三が制すると、藤崎君のアコ―

デイオンが校歌の前奏のメロデ―を

弾き始めた。

「はい、三、四！」と南島卓三が拍子

をとった。郷土出身の偉大な経済学者、

高田保馬が詩をつくっていた。

作詞 高田保馬

作曲 信時 潔

♪天山北に風を呼び

南祗園の川がなる

小城の広野の朝夕べ

集いて学ぶ喜びよ♪

子供の昔に戻ったように、みんな頭

を縦に揺すったり、横に傾げたりして

調子をとって校歌を歌った。かつての

少年少女達の斉唱が、早春の小城の里

にしめやかに流れた。

昭子が代表して亡夫勝のクラスメー
トらに挨拶した。
「皆様、有難うございました。今日の
ことは生涯忘れません。亡くなった主
人も草葉の陰で、さぞ喜んでいること
と存じます。皆様はこれからもお身体
を大事にして、長生きをして下さいま
せ。今日は久しぶりの晴れのクラス会
を存分に楽しんで下さい。では、私ど
もはこれで失礼させて頂きます。」と
深々とお辞儀をした。
「これから横川君を囲んで酒を飲みま
すので、しばらく遺影を貸して下さい
ませんか。」と南島卓三が頼んだので、
勝一が躊躇なく彼に手渡した。南島卓
三は、深く拝礼をして遺影の額を受け
取ると胸の前に掲げた。
そこにいた全員が立ち去ると、あた
りに静寂が戻った。あの十八歳の少年

の 日 、 故 郷 を 遠 く 離 れ る 横 川 勝 の 瞳 に
映 っ て い た の と 同 じ 残 雪 の 天 山 の 峰 に 、
早 春 の 真 昼 の 陽 光 が 白 く 照 り つ け て い
た 。 近 く の 藪 の 奥 か ら キ イ ー と 一 声 、
甲 高 い 鳥 の 啼 き 声 が 周 辺 の 空 気 を 鋭 く
切 り 裂 い て 消 え た 。 勝 が 子 供 の 頃 に 遊
び ま わ っ た 、 こ の 梅 の 木 の 生 え た 藪 の
中 こ そ 、 彼 が 妻 に 伝 え よ う と し た 散 骨
を 望 む 場 所 だ っ た の か も 知 れ な い 。

終